狭山市文化財調査報告　第30集

狭山市埋蔵文化財調査報告書　18

御所の内遺跡第6次調査
城ノ越遺跡第18次調査
鳥ノ上遺跡第2次調査

個人住宅建設・ガソリンスタンド建設・市道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

附篇　市内遺跡確認調査

2011

埼玉県狭山市教育委員会

狭山市文化財調査報告　第30集

狭山市埋蔵文化財調査報告書　18

御所の内遺跡第6次調査
城ノ越遺跡第18次調査
鳥ノ上遺跡第2次調査

個人住宅建設・ガソリンスタンド建設・市道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

附篇　市内遺跡確認調査

２０１１

埼玉県狭山市教育委員会

序

狭山市域の遺跡は中央を貫流する入間川の左右両岸に、川に沿う形で所在します。いずれも当時の人々の生活を知る上で、たいへん貴重なものです。しかし、昭和 40 年代後半より増加した諸々の開発行為により、これらの遺跡は破壊の危機にさらされることになります。当市ではそれら開発行為によって消滅してしまう埋蔵文化財を事前に発掘調査し、記録保存を行っています。

この報告書もその記録保存事業の一つの成果を表したものです。

本報告書は平成 19 年度及び平成 21･22 年度に、個人住宅建設･ガソリンスタンド建設･市道建設に伴って実施した発掘調査の報告書です。発掘調査では奈良・平安時代の住居跡などが発見され、隣接する同時代の遺跡群とともに、同時代の人々のくらしの一端を明らかにする資料が出土しています。また、附篇として平成 7 年度及び平成 18 年度に実施した確認調査出土資料を掲載しました。

この成果が当地域の研究と埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、市民の皆様の生涯学習に資するものになれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査においてご理解いただいた関係各氏の皆様、献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

狭山市教育委員会
教育長　松本　晴夫

例　言

1．本書は狭山市柏原地内所在の御所の内遺跡第6次調査、城ノ越遺跡第18次調査、鳥ノ上遺跡第2次調査、並びに市内遺跡確認調査の報告書である。

2．本書で報告する発掘調査は個人住宅建設･ガソリンスタンド建設・市道建設に伴うもので、狭山市教育委員会が発掘調査を実施し、個人住宅建設を国庫補助事業、残りを市単独事業として行った。

3．発掘調査届に対する県の受理番号及び発掘調査通知に対する狭山市の通知番号と調査原因は、以下のとおりである。なお、確認調査については附篇を参照されたい。

御所の内遺跡 第6次調査　平成19年10月3日付、教生文3-59号　個人住宅建設

城ノ越遺跡 第18次調査　平成21年6月1日付、狭教社発第68号　ガソリンスタンド建設

鳥ノ上遺跡 第2次調査　平成22年4月7日付け、狭教社発第8号　市道建設

4．発掘調査期間は、以下のとおりである。

御所の内遺跡 第6次調査　平成19年10月1日～平成19年10月31日

城ノ越遺跡 第18次調査　平成21年6月4日～平成21年7月4日

鳥ノ上遺跡 第2次調査　平成22年4月19日～平成22年4月30日

5．整理・報告書作成期間は、平成21年7月16日～平成22年9月31日である。

6．発掘調査は御所の内遺跡第6次調査を石塚和則・安井智幸が担当した。また、雨宮悟郎、岸幸子、小林はつみ、瀬戸山真由美、橋本弓子、遠藤義昌、岡田浩、田口和夫、田口文枝、藤野文二が参加した（敬称略、順不同）。城ノ越遺跡第18次調査・鳥ノ上遺跡第2次調査を石塚、三ツ木康介が担当した。

7．図版の作成と出土品の整理は、縄文時代を石塚が担当し、奈良・平安時代を三ツ木が担当した。また、雨宮悟郎、岸幸子、小林はつみ、瀬戸山真由美、橋本弓子、古川恵子の補助を受けた。

8．本書の執筆は石塚と三ツ木があたった。

9．本書の編集は狭山市教育委員会社会教育課が行い、三ツ木が担当した。

10．結語にて大東文化大学准教授である宮瀧交二氏に玉稿を賜った。

11．発掘調査および報告書作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略、五十音順）。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課

宮瀧　交二

凡　例

1．挿図の縮尺は以下のとおりである。また、各挿図にスケールを付した。
　遺構図：1/60、調査区全測図：1/200、遺物実測図：1/3、1/4、1/6
2．遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海抜高を示す。
3．遺構の表記記号は以下のとおりである。
　住居跡：SJ、掘立柱建物跡：SB、溝：SD、土壙：SK
4．遺物観察表の表記は口径、器高、底径はcmを単位とし、（　）内の数値は推定値・現存値である。色調は標準土色帖に照らし合わせた。胎土は肉眼で観察できるものを示し、焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。残存率は図示した器形に対し、5％単位で示したが、20％以下で特徴を示し難いものは「破片」として処理した。
5．本報告書に掲載した出土品は狭山市教育委員会で保管している。

目　次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
図版目次
Ⅰ　調査の概要……1
　1　発掘調査に至る経過……1
　2　発掘調査の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……3
Ⅲ　御所の内遺跡　第６次調査……9
　1　調査の経過と概要……9
　2　検出遺構と出土遺物……11
Ⅳ　城ノ越遺跡　第18次調査……19
　1　調査の経過と概要……19
　2　検出遺構と出土遺物……21
Ⅴ　鳥ノ上遺跡　第２次調査……25
　1　調査の経過と概要……25
　2　検出遺構と出土遺物……25
Ⅵ　結語……30
附篇　市内遺跡確認調査……35
　1　富士塚遺跡の調査……35
　2　中原遺跡の調査……36

挿図目次

第 1 図　狭山市遺跡分布図 ……4
第 2 図　御所の内遺跡第 6 次調査位置図 ……8
第 3 図　御所の内遺跡第 6 次調査区全測図 …10
第 4 図　第 1 号住居跡 ……12
第 5 図　第 1 号住居跡出土遺物 ……13
第 6 図　第 2･3 号住居跡・第 1 号土壙 ……14
第 7 図　第 2 号住居跡カマド
　　第 2 号住居跡出土遺物 ……15
第 8 図　第 3 号住居跡出土遺物 ……17
第 9 図　第 4 号住居跡
　　第 4 号住居跡出土遺物 ……18
第 10 図　城ノ越遺跡第 1 8 次調査位置図 ……20
第 11 図　城ノ越遺跡第 1 8 次調査区全測図 ‥21
第 12 図　第 55 号住居跡 ……22
第 13 図　第 55 号住居跡出土遺物 ……23
第 14 図　鳥ノ上遺跡第 2 次調査区位置図
　　全測図 ……26
第 15 図　第 3 号住居跡・道路状遺構 ……27
第 16 図　第 3 号住居跡出土遺物 ……28
第 17 図　第 6 号土壙 ……29
第 18 図　富士塚遺跡確認調査位置図 ……35
第 19 図　富士塚遺跡確認調査出土遺物……36
第 20 図　中原遺跡確認調査位置図 ……36
第 21 図　中原遺跡確認調査出土遺物
　　（縄文時代） ……37
第 22 図　中原遺跡確認調査出土遺物
　　（奈良・平安時代） ……38

写真図版目次

図版1　御所の内遺跡第6次調査区全景
　　御所の内遺跡第6次調査風景
図版2　第1号住居跡全景
　　第1号住居跡東カマド
　　第1号住居跡出土遺物
図版3　第2･3号住居跡
　　第2･3号住居跡カマド
図版4　第2･3号住居跡出土遺物
図版5　第4号住居跡全景
　　第4号住居跡出土遺物
図版6　城ノ越遺跡第18次調査区全景
　　第55号住居跡カマド
図版7　第55住居跡出土遺物
図版8　鳥ノ上遺跡第2次調査区全景
　　第3号住居跡全景
図版9　第3号住居跡カマド（つくりかけ）
　　道路状遺構
　　第6号土壙
　　第3号住居跡出土遺物

Ⅰ　調査の概要

1　発掘調査に至る経過

狭山市教育委員会では、昭和 58 年度以降、国及び県の補助を得て、民間開発及び個人住宅建設に関わる埋蔵文化財確認調査、後者については記録保存を目的とした発掘調査を実施している。これらの調査は通常、農業委員会事務局や建設部開発審査課などの開発行為に関わる部局との連携により、開発者との調整を行い随時実施している。

今回報告の御所の内遺跡第 6 次調査及び城ノ越遺跡第 18 次調査・鳥ノ上遺跡第 2 次調査は、個人住宅建設とガソリンスタンド建設・市道建設に伴うものである。発掘調査にいたる過程は、事前に確認調査の依頼を受けて、遺構の有無を確認し、遺構確認後は、開発者との協議の上、発掘調査を工事日程に支障のきたさないよう調整し、平成 19 年度及び平成 21・22 年度に国庫補助事業と市単独事業として実施した。

各調査の文化財保護法第 98 条第 2 項の規定による埋蔵文化財発掘調査届に係る文化庁長官の受理通知と、文化財保護法第 99 条第 2 項の規定による埋蔵文化財発掘調査通知に係る狭山市の通知番号は例言に示したとおりである。

各調査区の所在地、調査面積等は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査面積	時　　代
御所の内遺跡第 6 次調査 (県遺跡番号 22-012)	狭山市柏原字御所ノ内 2438 番 32.33	304㎡	奈良・平安
城ノ越遺跡第 18 次調査 (県遺跡番号 22-013)	狭山市柏原字城ノ越 2323-2 の一部	70㎡	奈良・平安
鳥ノ上遺跡第 2 次調査 (県遺跡番号 22-010)	狭山市柏原字笹久保 468 の一部	100㎡	奈良・平安

2　発掘調査の組織

1）発掘調査（平成 19・21・22 年度）

主体者	狭山市教育委員会	教育長	門倉節明（平成 19・21 年度）
			松本晴夫（平成 22 年度）
	生涯学習部	部　長	松本晴夫（平成 19 年度）
			向野康雄（平成 21・22 年度）
		次　長	梅村貞之（平成 22 年度）
		参　事	梅村貞之（平成 21 年度）
担当課	社会教育課	課　長	利根川忠男（平成 19 年度）
			白倉　孝（平成 21・22 年度）
	文化財担当	主　査	半貫芳男
		主　査	石塚和則
		主　任	田口　勉（平成 19 年度）
		主　事	安井智幸（平成 19 年度）
		主　事	北山誠也（平成 21・22 年度）
		主　事	三ツ木康介（平成 22 年度）
		主事補	三ツ木康介（平成 21 年度）
	調査担当		石塚和則
			安井智幸（平成 19 年度）
			三ツ木康介（平成 21・22 年度）

2）整理・報告（平成 21・22 年度）

主体者	狭山市教育委員会	教育長	門倉節明（平成 21 年度）
			松本晴夫（平成 22 年度）
	生涯学習部	部　長	向野康雄
		次　長	梅村貞之（平成 22 年度）
		参　事	梅村貞之（平成 21 年度）
担当課	社会教育課	課　長	白倉　孝
	文化財担当	主　査	半貫芳男
		主　査	石塚和則
		主　事	北山誠也
		主　事	三ツ木康介（平成 22 年度）
		主事補	三ツ木康介（平成 21 年度）
	整理担当		石塚和則
			三ツ木康介

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

狭山市域を北東流する入間川は、外秩父山地の伊豆ヶ岳・武川岳等を水源とする名栗川と青梅市に水源を持つ成木川、その他小河川を合わせて市域に入り、流域を開析して北側の左岸には二段、南側となる右岸には三段の河岸段丘を発達させ、さいたま市と川越市の境界付近で荒川に合流する。

本遺跡の所在する入間川左岸の通称入間台地は、入間川をはさんで南側に狭義の武蔵野台地と対峙し、北側は越辺川によって区切られている。その南縁である入間川左岸流域には、旧石器時代から中世に至る多くの遺跡が立地している。市内遺跡は、北から宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、鳥ノ上遺跡、森ノ上遺跡等が立地し、若干離れて上広瀬古墳群、今宿遺跡、金井上遺跡、宮地遺跡、東八木窯跡群等が帯状に連なる。また、入間川の北を流れる南小畔川と入間川の間は比較的平坦に見えるが、旧地形は多くの小河川によって開析された小支谷に、埋没谷を含めて非常に複雑な地形を呈している。このような小河川の一つ、智光山公園内に水源を持つ現在の５号幹線水路の両岸には、丸山遺跡、宮原遺跡を始めとする多くの縄文時代遺跡が分布している。

入間川右岸は武蔵野台地に属する旧多摩川の隆起扇状地で、北から稲荷上遺跡、揚櫨木遺跡、坂上遺跡、戸張遺跡、中原遺跡、峰遺跡、滝祇園遺跡等が左岸の遺跡群に対峙する形で集落を形成している。右岸域は地下水脈に乏しく飲料水の確保が困難であるため、入間川の存在もさることながら、遺跡形成は段丘崖線沿いの湧水点を基盤としていたと考えられ、それを証するように、左岸の様相とは異なり内陸部、所沢市方面に行くに従い遺跡数は激減する。

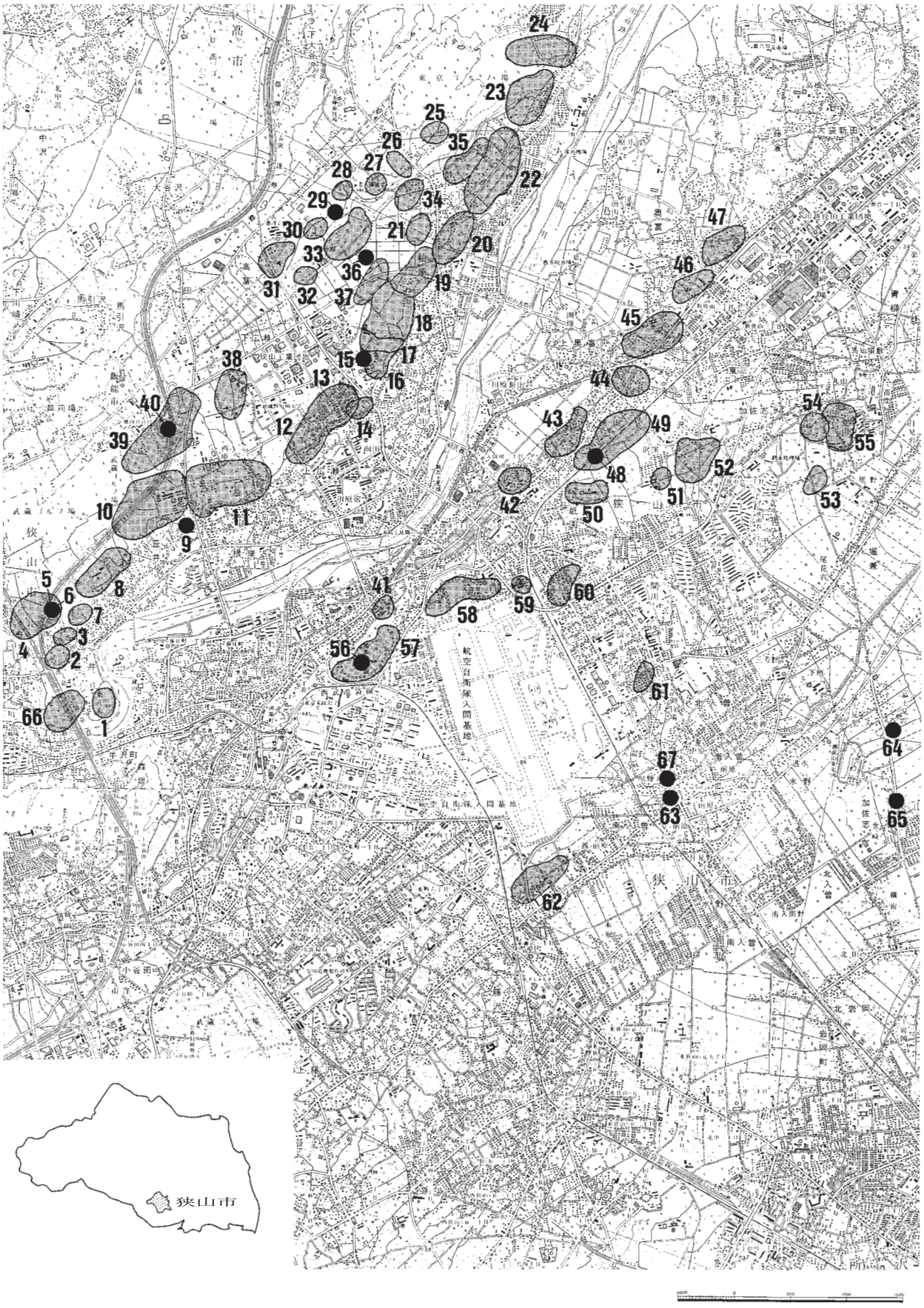
2　歴史的環境

狭山市内には 67 箇所の遺跡が所在する（第１図）が、その大多数が縄文時代と奈良・平安時代の複合集落遺跡である。昭和 60 年代以降、首都圏中央連絡自動車道（以下、圏央道）関係の調査を含めて、数々の発掘調査が実施され、多くの成果が上げられている。これらの成果の蓄積と継続的に行う分析により、今後市域を含めた本地域の歴史的動態を明らかにしていくことが可能となろう。ここでは、近年の新知見を加えて概述するとともに、市内の各時代の遺跡群を俯瞰することにする。

旧石器時代の遺跡としては、平成２年度から平成３年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡（39）発掘調査において、旧石器時代の石器製作跡が多数発見され、当市における当該時代の一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成６年度に同遺跡の発掘調査を行い、武蔵野台地第４層下部の良好な資料を得ている。また、宮地遺跡（8）では細石刃、細石核が表採されている。

縄文時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されているが、早期末までは土壙、炉跡などの遺構が検出されるに留まる。集落の呈をなすのは前期黒浜期以降で、遺跡数の急激な増加でも画期となり得るが、集落規模の拡大、長期化の面では中期中葉勝坂期から後葉加曽利Ｅ期のものが大勢を占め、この時期偏差が市内の縄文時代遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中する。

草創期の遺跡としては、入間川左岸の金井上遺跡（10）、西久保遺跡（39）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、下双木遺跡（36）、丸山遺跡（25）、右岸では滝祇園遺跡（42）と市内各地で当該期のものと考えられる



第１図　　狭山市遺跡分布図

狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

1　東八木窯跡群（22049）奈・平
2　八木遺跡（22068）縄（前・中）、奈・平
3　八木北遺跡（22021）奈・平
4　八木上遺跡（22022）縄（前・中）、奈・平
5　沢口上古墳群（22020）古（後）
6　笹井古墳群（22019）古（後）
7　沢口遺跡（22080）縄（早～中）、古、奈・平
8　宮地遺跡（22018）縄（中）、奈・平
9　金井遺跡（22071）中
10　金井上遺跡（22023）縄（草・前）、奈・平、中
11　上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草）、奈・平
12　霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）、奈・平
13　今宿遺跡（22002）縄（早～中）、奈・平
14　上広瀬古墳群（22001）古（後）
15　森ノ上西遺跡（22079）先
16　森ノ上遺跡（22008）縄（中）奈・平
17　富士塚遺跡（22009）縄（中）奈・平
18　鳥ノ上遺跡（22010）奈・平
19　小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）、古～中
20　御所の内遺跡（22012）奈・平
21　英遺跡（22074）奈・平、中
22　城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）、奈・平、中
23　宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）、奈・平
24　字尻遺跡（22075）縄（前～後）、奈・平
25　丸山遺跡（22037）縄（早・前～後）奈・平
26　金井林遺跡（22035）縄（前～後）
27　鶴田遺跡（22044）縄（前・中）
28　上ノ原東遺跡（22065）奈・平
29　上ノ原西遺跡（22063）縄（中）
30　半貫山遺跡（22061）中
31　稲荷山遺跡（22058）縄（後）
32　前山遺跡（22059）縄（中）
33　高根遺跡（22062）縄（早・中・後）
34　町久保遺跡（22034）縄（中）、奈・平、中
35　宮原遺跡（22017）縄（前～後）
36　下双木遺跡（22078）縄（草）
37　上双木遺跡（22077）縄（中・後）、奈・平
38　上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平
39　西久保遺跡（22069）先、縄（草）、奈・平
40　東久保遺跡（22070）先
41　上諏訪遺跡（22086）縄（中・後）
42　滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）、古、奈・平
43　峰遺跡（22024）縄（中・後）、奈・平
44　戸張遺跡（22026）縄（前・中）、奈・平
45　揚櫨木遺跡（22027）縄（前・中）、奈・平
46　坂上遺跡（22029）縄（中）、奈・平
47　稲荷上遺跡（22032）縄（前・中）、奈・平
48　上中原遺跡（22025）先
49　中原遺跡（22025）縄（早～後）、奈・平
50　沢台遺跡（22079）縄（中）、奈・平
51　沢久保遺跡（22041）縄（中）
52　下向沢遺跡（22042）縄（中・後）、奈・平
53　吉原遺跡（22067）縄（前）
54　下向遺跡（22085）縄（前～後）
55　台遺跡（22084）縄（前～後）
56　稲荷山公園古墳群（22052）古（後）
57　稲荷山公園遺跡（22051）縄（中）
58　石無坂遺跡（22083）縄（中）奈・平
59　富士見西遺跡（22082）縄（中）、奈・平
60　富士見北遺跡（22072）縄（前・中）、奈・平
61　富士見南遺跡（22081）縄（中）
62　町屋道遺跡（22088）縄（前～後）、奈・平
63　七曲井（22046）中
64　堀兼之井（22047）中
65　八軒家の井（22076）中
66　八木前遺跡（22087）縄（前・後）
67　堀難井遺跡（22089）中

尖頭器が出土している。今後も単独出土例が増加するものと思われるが、現時点では土器を伴っていないため本期の詳細については不明である。

早期では押型文土器の小破片が高根遺跡（33）で出土している他、同一水系の日高市向山遺跡では本段階の住居跡６軒が検出されており、南小畔川右岸沿いには該期の遺跡が多く分布する可能性が指摘できる。早期後半では、今宿遺跡（13）で条痕文系土器を伴う炉穴が検出されている。

前期前半は花積下層式土器が今宿遺跡で、関山式土器が宮原遺跡（35）で出土しているが、未だ遺構の検出を見ていない。黒浜期には、市内でもまとまった集落調査例がある。昭和 56 年に調査された入間川右岸の揚櫨木遺跡（45）では、段丘崖に沿って線状に展開する住居跡群が検出されている。本遺跡に近接する稲荷上遺跡（47）でも同時期の遺構が検出され、良好な一括資料を得ている。左岸では笹井地区に該期遺跡の集中があり、八木前遺跡（66）、八木遺跡（２）、八木上遺跡（４）では、圏央道関連の調査において黒浜期の遺構が調査され、これらを含めれば入間川両岸にわたって黒浜期集落が展開していた様相が明確である。諸磯期以降の遺跡としては、笹井に所在する金井上遺跡、八木上遺跡（４）があり、前者では前期後半の包含層、後者では前期終末期の住居跡が１軒検出されている。

中期には表面採集資料も含めてであるが、遺跡数は 39 箇所と急増し市内遺跡全体の 60％を超える。代表的な遺跡としては、入間川左岸では丸山遺跡（25）、後期後半までの継続が確認されている宮原遺跡が市域東部の柏原に、大規模な集落跡として著名な宮地遺跡が市域西部の笹井に位置する。入間川右岸の遺跡としては稲荷上遺跡があり、近年の調査により中期後半の遺構が多数検出されている。宮地遺跡は現在までに７次にわたる調査が実施されている。100 軒に及ぶ住居跡が検出され、それらの分布状況から双環状集落であることが確認された。主体となる時期は、勝坂期中頃から加曽利ＥⅢ期に及ぶが、称名寺式土器を伴う土壙も検出されており、後期初頭まで継続するのは確実とみられる。中期末から後期初頭では、周辺地域にも認められるように集落規模は急速に縮小する。中期末では、入間川左岸において前述の宮地遺跡、柏原の森ノ上遺跡（16）、字尻遺跡（24）、右岸では揚櫨木遺跡（45）等、市内各地で継続期間が限定的な小規模な集落跡が確認されており、加曽利ＥⅢ期から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されている。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市、飯能市、日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いと思われる。

縄文時代晩期から弥生時代にかけては、当市では確認例が非常に少なく、森ノ上遺跡の土壙から弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる搬入土器が一点出土しているのみである。

古墳時代の遺跡として当市には沢口上古墳群（５）、笹井古墳群（６）、上広瀬古墳群（14）、稲荷山公園古墳群（56）と滝祇園遺跡（42）が所在する。現在まで調査が実施されたのは笹井古墳群、上広瀬古墳群で、７世紀後半のものと考えられる。笹井古墳群は石室の構造が特異なため、奈良時代以降の墳墓の可能性も否定できない。当該期の集落遺跡は、現在のところ滝祇園遺跡（42）が唯一であり、竪穴住居跡１軒が検出されている。

奈良･平安時代の集落は入間川左岸に帯状に 23 遺跡､右岸は久保･不老川流域を含めて 14 遺跡存在する。市域での集落形成の契機は、高麗郡の建郡と考えられる。高麗郡は渡来人の高度な技術で未開発地域の開墾を進めようとする中央政府の意図によって東海道・東山道に分散していた渡来人が集められ、霊亀２年（716 年）に入間郡の一部を割いて設置された郡である。当地方に移住してきた渡来人たちがもたらした技術は、主に窯業技術と鉄製品生産技術と考えられており、窯業については東八木窯跡（１）を含む東金

子窯跡群の操業開始が、鉄製品生産技術に関しては羽口や鉄滓の出土状況から推定される小鍛冶の開始と在地産鉄製品の普及がその例として挙げられる。

８世紀中頃に東金子窯跡群での須恵器生産が開始され、入間川両岸での居住もほぼ同時期に開始されたと考えられる。当該期の遺跡として宮ノ越遺跡（23)、森ノ上遺跡、小山ノ上遺跡（19)、揚櫨木遺跡等が挙げられ、東金子古段階の前内出窯古式とそれに並行する南比企の須恵器が出土している。

若干時代が下る８世紀後半から９世紀初頭には前内出窯新式の須恵器が普及し、入間川左岸の宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡（22)、上広瀬上ノ原遺跡（11)、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、宮地遺跡では東金子産の須恵器の割合が南比企産を圧倒的に上回る。窯に近くなるほどこの東金子産の割合が大きくなるのだが、右岸の揚櫨木遺跡では東金子窯跡群に近いにもかかわらず南比企産の須恵器が出土遺物の１／３を占める。

９世紀中頃には、東金子窯産須恵器が当地方で広く使用されるようになる。入間川左岸では宮ノ越遺跡から城ノ越遺跡、御所の内遺跡（20)、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、上広瀬上ノ原遺跡、霞ヶ丘遺跡（12)、今宿遺跡、金井上遺跡、宮地遺跡へと連綿と集落が形成されているが、当該期とされる住居跡が圧倒的に多い。右岸でも稲荷上遺跡、揚櫨木遺跡、戸張遺跡（44)、中原遺跡（49)、峰遺跡（43)、滝祇園遺跡と、左岸ほどではないがやはり帯状に集落が形成されている。このような集落規模の拡大や住居跡軒数の増加は、承和 12 年（845 年）に開始された国分寺の再建が契機となり、八坂前・新久Ａ－１・２窯（入間市）で瓦焼成が行われたことによる大規模な人資の流入が直接的な要因と考えられる。また、東金子窯跡群の生産も増加し、例えば揚櫨木遺跡では東金子産須恵器が左岸の遺跡と同等の９割を占めるようになる。

９世紀後半以降、住居数は次第に減少し、入間川両岸における住居数や密度の差異はほとんど見られなくなる。当該期の遺跡である宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡、稲荷上遺跡、揚櫨木遺跡、戸張遺跡、中原遺跡からは新久Ａ－１・２窯からＤ－１・３窯の東金子系須恵器が出土するが約半数は還元焔焼成が上手く行われていない。これに伴い、土師質須恵器の坏や埦も出現し始める。これら状況は、長期操業の弊害である燃料材不足など生産に関わる諸環境の悪化や、さらに国分寺再建事業の終了による窯跡群の衰退を明確に示していると思われる。瓦焼成終了後も須恵器は生産されているが、生産規模は縮小されており、操業を終えるとともに周辺集落の人口も減少していったものと考えられる。

中世以降の遺跡としては、鎌倉街道上道と主要支道である堀兼道が市域を貫いており、一部には道路状の切り通しが往時の遺構として残存している。また、この路線に沿って七曲井や堀兼之井などの所謂「まいまいず井戸」が点在する。これらの井戸は、奈良・平安時代に由来すると考えられるが、七曲井は近世に至るまで修復され使用された記録が残されている。入間川左岸では、柏原に中世末の遺構とされる城山砦が城ノ越遺跡内に所在する。同じく柏原所在の小山ノ上遺跡で、平成５年度の調査で幅約６ｍ、深さ 2.8ｍ前後を測る大規模な堀跡が検出されている。同遺跡では昭和 60 年度の（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査でも館跡と考えられる堀跡が検出されており、両者の関係が注目される。なお、隣接する鋳造遺跡とされる英遺跡でも同規模の堀跡が検出され、覆土中から 15 世紀末の内耳鍋、かわらけが出土している。いずれにしても、中世については断片的な遺構検出に留まっており、該期以降の市域の様相について、文献資料を補強する意味でも今後の考古資料の増加が望まれる。

第２図　御所の内遺跡第６次調査位置図

Ⅲ　御所の内遺跡第６次調査

１　調査の経過と概要

調査は個人住宅建設に伴うもので、平成 19 年９月１日付で原因者より埋蔵文化財発掘届が提出された。当該開発予定地は、平成 15 年度に、計画自体は中止となったが、グループホーム建設に先立って試掘調査が行われており、遺構の所在が確認されていた。市教育委員会はこの経緯を原因者に説明するとともに、本発掘調査の了解を得た。調査は平成 19 年 10 月１日から平成 19 年 10 月 31 日にかけて実施した。

調査の経過は以下のとおりである。

平成 19 年度

10 月１日（月）～ 10 月４日（木）

重機による表土除去作業。平安時代の住居跡４軒確認。

10 月５日（金）

本調査開始。仮設トイレ設置。機材搬入。遺構確認後、各遺構の掘り下げを開始する。

10 月 10 日（水）～ 10 月 11 日（木）

遺構掘り下げ継続。４軒ともに床面までの掘り下げ終了。

10 月 12 日（金）

土層断面図作成。

10 月 15 日（月）

調査区内清掃。全景及び各遺構の個別写真撮影。

10 月 16 日（火）～ 10 月 17 日（水）

遺構平面作成。第１・３号住居跡カマド調査開始。

10 月 18 日（木）～ 10 月 22 日（月）

カマド調査継続。断面図作成及び写真撮影終了。第３号住居跡貼床調査。第２・３号住居跡カマド平面図作成。

10 月 23 日（火）

第１号住居跡カマド平面図作成。現地作業終了。機材撤収。

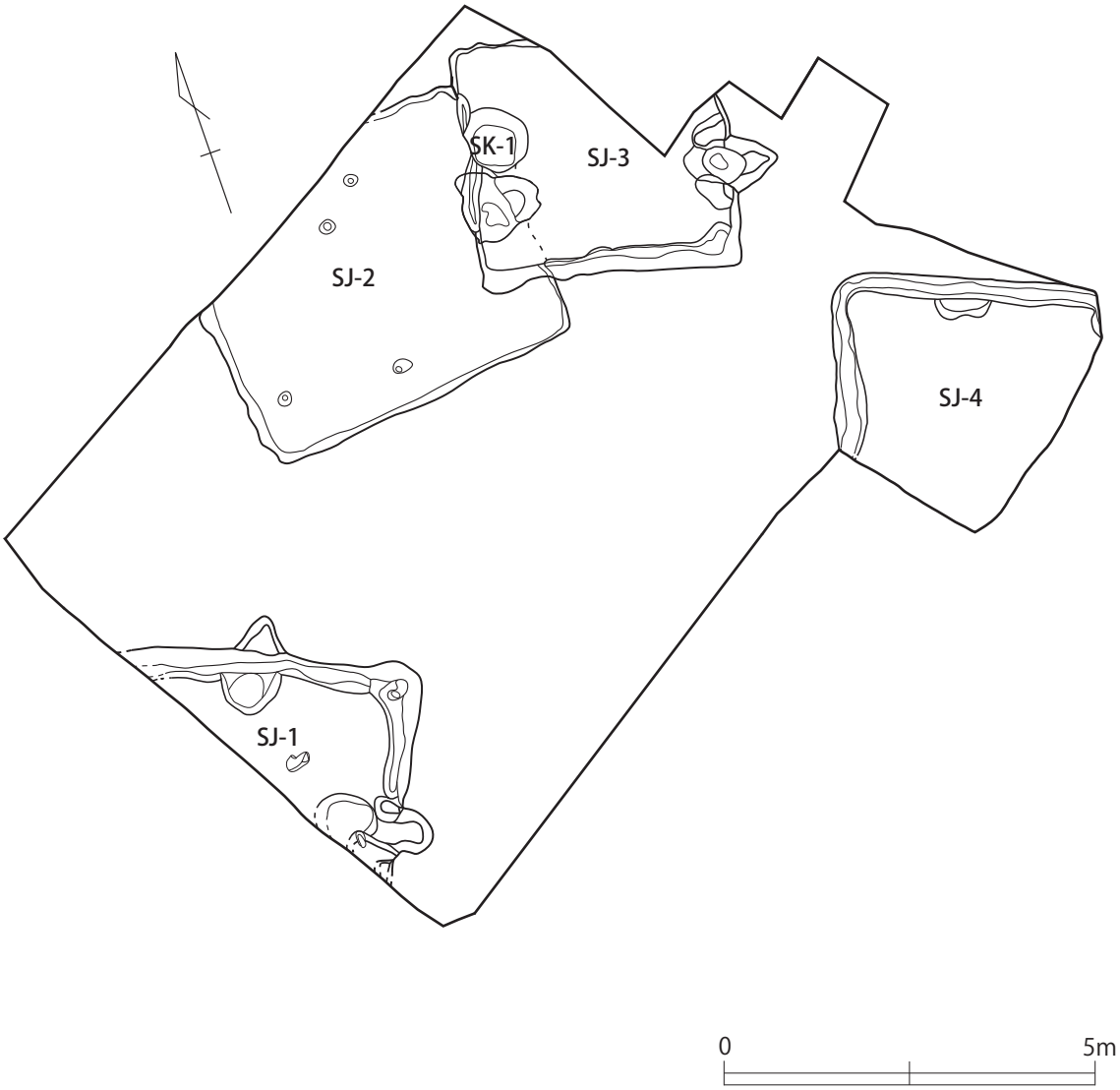
10 月 24 日（水）～ 10 月 25 日（木）

調査区埋め戻し。

10 月 31 日（水）

仮設トイレ撤収。

調査の結果、検出された遺構は奈良・平安時代の竪穴住居跡４軒と土壙１基である。なお、遺構番号は第１～５次調査で遺構が検出されていないため、第１～４号住居跡と第１号土壙となる。



第３図　御所の内遺跡第６次調査区全測図

２　検出遺構と出土遺物

住居跡

第１号住居跡（第４図）

本住居跡は調査区南側に位置する。平面形は、遺構の約２/３が調査区外にあるが、恐らく一辺４m強の方形プランを呈するものと思われる。深さは0.4 m程度である。主軸方向は北カマドを主体とするとN－30°－E、東カマドを主体とするとN－115°－Eを指す。

床面は全体的に堅緻で、東カマド周辺から中央にかけて粘土による貼床が認められた。検出されている壁溝は、幅広で恐らく全周するものと思われる。柱穴は検出されなかった。

カマドは、北壁と東壁のほぼ中央に位置した場所に、一つずつ検出している。北カマドは破壊されており、東カマドに作り替えたものと考えられる。東カマドの袖の先端には、補強材として川原石が埋め込まれていた。

出土遺物は須恵器坏や土師器甕、鉄製刀子が出土しており、多くが東カマド前から出土している。1～5は須恵器坏である。1は器厚が均一で全体的にやや薄い、口縁部は外反しており、全体がやや歪んでいる。底部は回転糸切り後周辺を指で均している、南比企産。2は底部が若干上げ底で厚く、口唇部にいくほどやや薄くなる。口縁部は外反しており、内側がかなり磨耗している。底部は回転糸切りのみ、東金子産。3は底部中心に行くほど器厚が薄くなり、口縁部は外反し、一部に自然釉が付着している。内面には降灰の跡が残る。底部は回転糸切りのみ、東金子産。4は底部が若干厚くなっており、口縁部はやや外反し、重ね焼きの跡が残る。底部は回転糸切りのみ、東金子産。5は底部から体部下位の破片である。体部と底部の境に明確な段を持つ。底部は回転糸切りのみ、東金子産。6は土師器甕の口縁部である。口縁部は「く」の字状を呈しており、器厚はかなり薄い。7は直刀形を呈する鉄製刀子の刃先部分のみで両関の部分は欠損している。

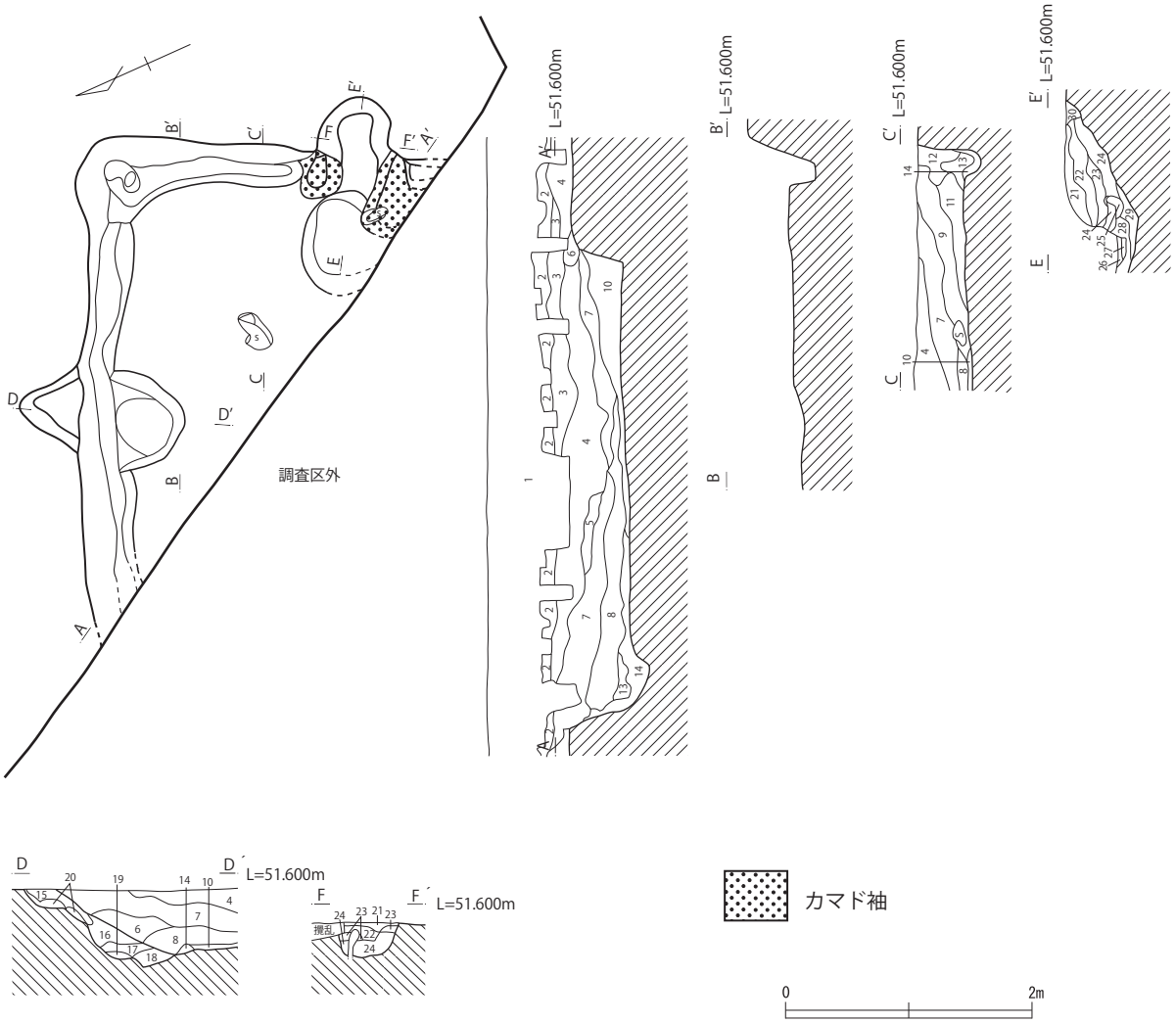
第２号住居跡（第６･７図）

本住居跡は調査区北東部に位置する。遺構北側の一部が調査区外にあり、東側で第３号住居跡と重複している。新旧関係は、第２号住居跡を切って第３号住居跡が形成されていることから、第２号住居跡のほうが古い。平面形は南北に長い長方形プランを呈し、全体の規模は長軸長3.7 m、短軸長3.2 m、深さは0.36 mを測る。主軸方向はN－80°－Eを指す。

床面は中央部及びカマド前面が堅緻で、壁溝付近は軟弱である。壁溝、柱穴は確認されなかった。

カマドは北壁に構築されていたが、第３号住居跡構築時に破壊されたと推測される。遺存状態は不良である。

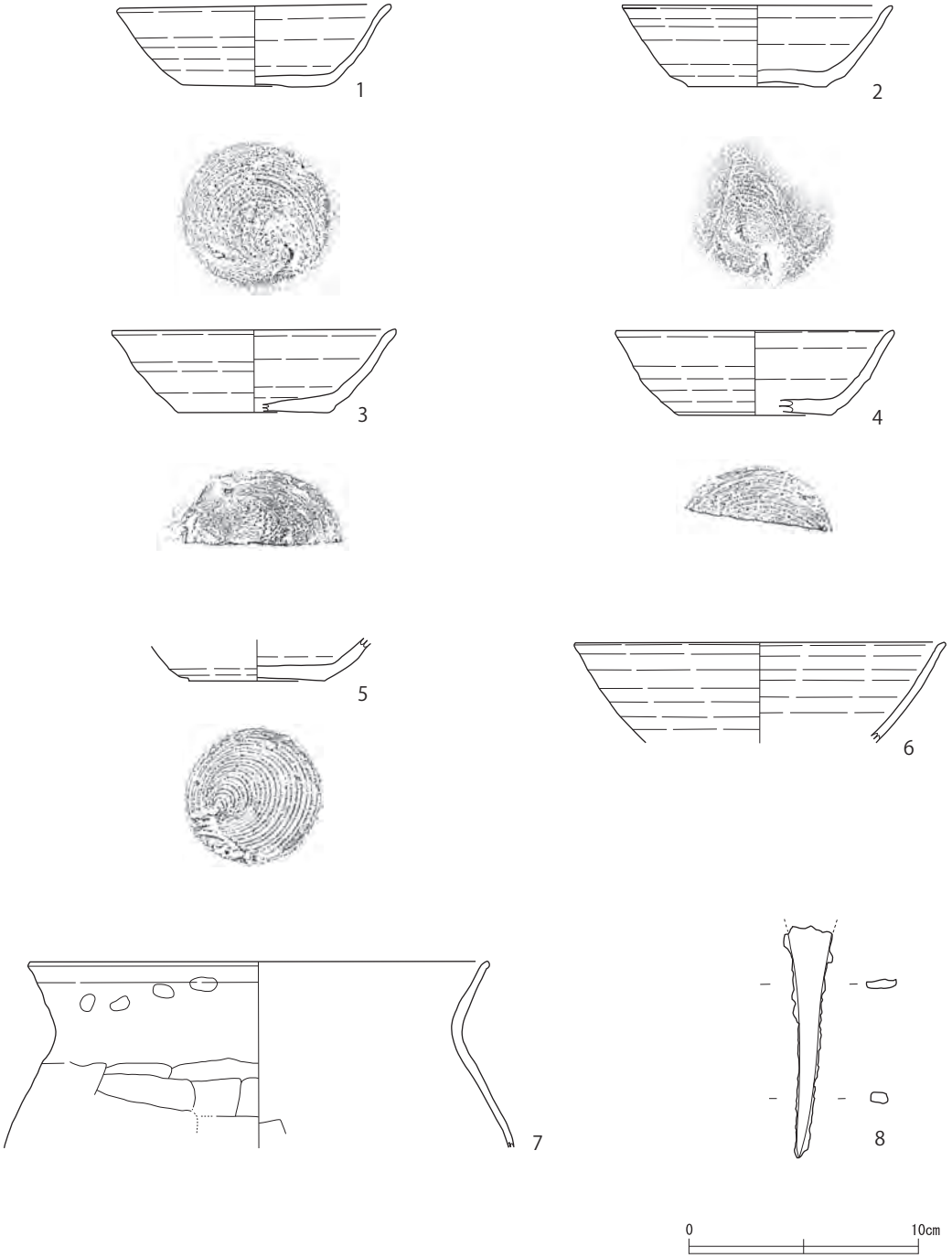
出土遺物は須恵器が出土しており、床面直上及び第３号住居跡貼床下から坏の完形、半完形品が出土している。1～3は須恵器坏である。1は器厚が底部で若干厚く、体部は薄くなっており、口縁部は外反している。内面の底部と体部の境に爪先の跡がある。底部は全面回転ヘラ削り、南比企産。2は器厚が全体的に厚い。内外面ともに火襷痕が入っている。底部は回転糸切り後周辺回転ヘラ削り、南比企産。3は器厚が全体的に均一で、口唇部がややとがっている。底部は回転糸切り後周辺回転ヘラ削り、東金子産。4は須恵器埦である。器厚は底部に厚みを持ち、体部が薄くなっている。口縁部は若干歪んでおり、内面には爪先による溝が見られる。底部は全面回転ヘラ削り、東金子産。



(SJ-1)

1　暗灰色土　耕作土・攪乱層
2　黒色土　ローム粒・焼土・炭化物を少量含む
3　暗茶褐色土　1層よりローム粒・焼土を多く含む
4　暗褐色土　ローム粒・焼土・炭化物を多く含む
5　暗褐色土　多量の焼土が混入
6　暗褐色土　7層に似るが焼土を多く含有する
7　暗褐色土　ローム粒は4層より少ない　炭化物・焼土は4層より粒が大きく量が多い
8　黒褐色土　ローム粒の含有が少ないため色調が暗い　焼土・炭化物を含有
9　暗灰色土　多量の粘土を含有　ローム粒・焼土粒・炭化物を多く含む
10 暗褐色土　ロームを多く含む　軟質
11 黄褐色土　ロームを主体とする
12 暗褐色土　ローム粒を多く含む　色調も黄色が強い　焼土炭化物は7層より大きい
13 黒褐色土　12層よりロームが少ない
14 黒褐色土　13層よりロームが大きく黒色が強い
15 暗灰色土　7層より多く焼土を含む
16　暗灰色土　粘土を主体とする　焼土混入
17 暗赤褐色土　焼土を多量に含有する
18 明赤褐色土　焼土・焼土ブロックを主体とする　粘土を混入
19 黒褐色土　ローム粒・焼土・炭化物を多く含む　軟弱
20 暗黄褐色土　ロームを主体とする
21 暗灰色土　多量の粘土を含有　他にローム粒・焼土・炭化物を多く含む
22 暗褐色土　21層より粘土が少ないがローム粒・焼土は多い
23 暗褐色土　22層より粘土を多く含む　ローム粒は少ない
24 暗赤褐色土　多量の焼土粒・焼土ブロックを含む　他に粘土混入
25 暗赤褐色土　焼土ブロック（大）とロームブロックの層
26 暗赤褐色土　24層に酷似するが粘土が多い
27 暗赤褐色土　焼けた粘土層
28 暗灰色土　粘土を主体とし焼土が混入する
29 暗灰色土　粘土を主体とする層
30 暗黄褐色土　ロームを主体とし粘土が混ざる

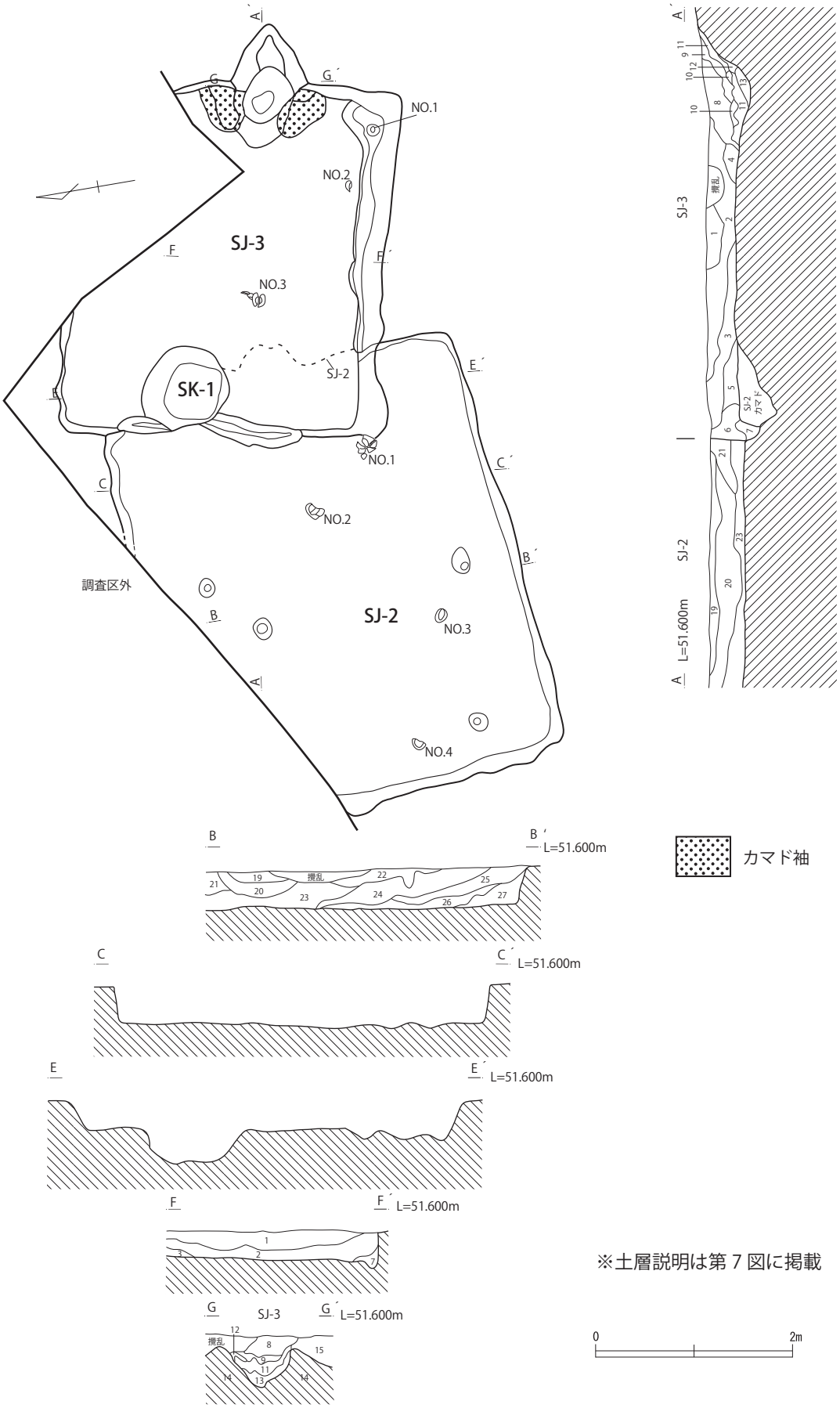
第４図　第１号住居跡



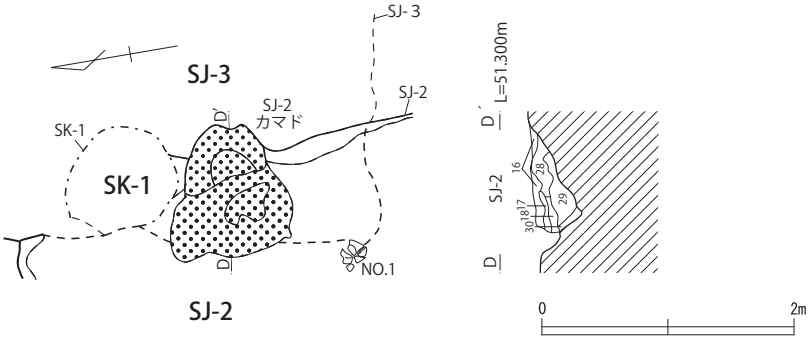
第５図　第１号住居跡出土遺物

第１号住居跡出土遺物観察表

NO	器　種	口径	底径	器高	残存率	胎　土	焼成	色調	特　徴
1	須恵坏	11.8	6.3	3.6	80%	白色粒・白色針状・小礫	普通	暗灰色	回転糸切り。南比企産
2	須恵坏	11.7	6.0	3.6	40%	白色粒・砂粒	良好	暗灰色	回転糸切り。内面が磨耗。東金子産
3	須恵坏	12.3	6.8	3.6	40%	白色粒・砂粒	良好	暗灰色	回転糸切り。口縁部の一部に自然釉。東金子産
4	須恵坏	(12.0)	(7.1)	3.7	20%	白色粒・石英	普通	明灰色	回転糸切り。口縁部に重ね焼き痕。東金子産
5	須恵坏	－	5.8	(1.9)	破片	白色粒・砂粒	良好	灰色	底部のみ残存。回転糸切り。東金子産
6	須恵坏	(12.0)	－	(4.4)	破片	白色粒・砂粒	不良	明灰色	器厚が薄い。東金子産
7	土師甕	(20.0)	－	(8.1)	破片	白色粒・赤色粒・長石・石英	不良	灰褐色	口縁部「コ」の字状。口縁部歪みあり
8	鉄製刀子	全長 10.1cm、最大幅 1.9cm、重さ 15g　茎部から刃先まで残存							

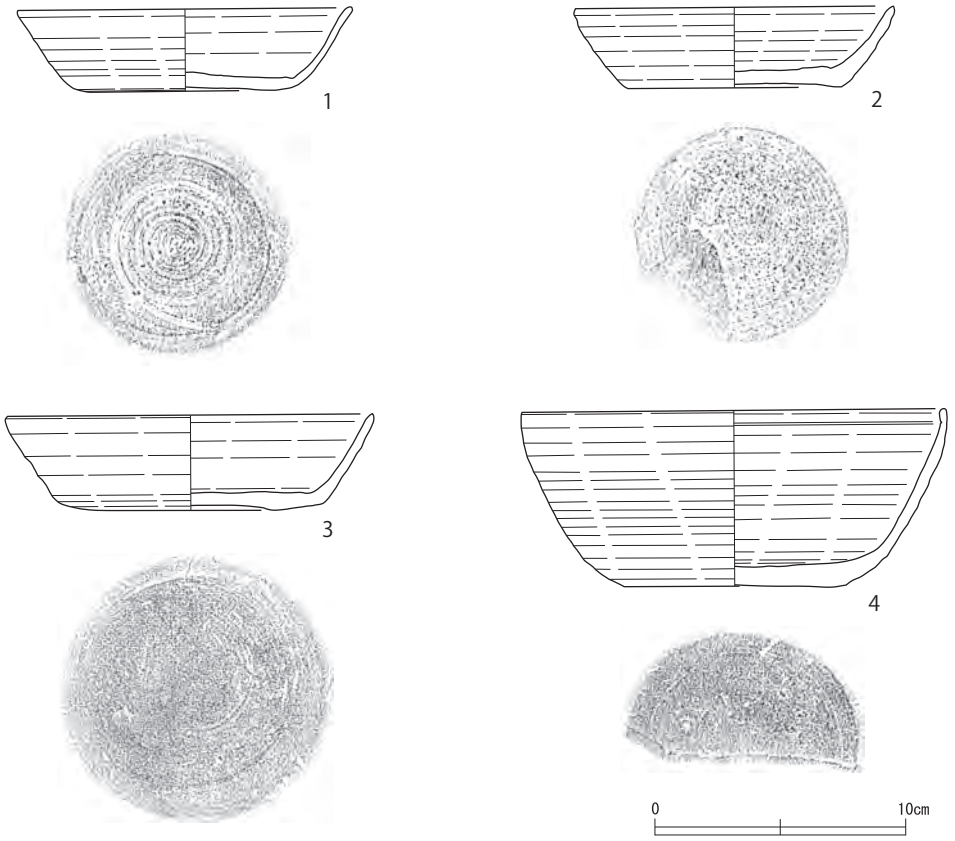


第６図　第２・３号住居跡、第１号土壙



（SJ-2・3）

1 暗茶褐色土　ローム・焼土・炭化物の粒子を多く含む黒色土
2 暗黄褐色土　ローム粒が多くロームブロックも含む　焼土粒・炭化物も少量含む
3 暗褐色土　ローム粒・焼土粒が含まれる　炭化物は見られない
4 灰白色土　粘土を多く含む黒色土層
5 暗茶褐色土　ローム粒・焼土粒を含む　4層より黒色強い
6 黒褐色土　ローム・焼土を若干含むが黒色土が主体
7 暗黄褐色土　ローム・焼土・炭化物・粘土の混合層（SJ-2のカマド痕の崩落土か）
8 灰褐色土　粘土質　焼土・炭化物を含む
9 灰白色土　粘土質　焼土主体で焼土・炭化物を含む　よくしまっている
10 黒色土　炭化物主体の層　焼土も多く含む
11 赤褐色土　焼土主体の層　炭化物と粘土も含む
12 黄褐色土　ローム主体の層　壁体の崩落土か
13 黄褐色土　ロームブロックを多く含む　被熱しているためもろい
14 灰白色土　カマドのソデにあたる粘土層
15 住居壁体
16 暗黄褐色土　SJ-3の貼床土　ロームブロック・黒色土が多く焼土は若干混入する
17 暗茶褐色土　SJ-3の貼床土　16層よりロームブロック量が少ない　もろい
18 暗褐色土　SJ-3の貼床土　17層よりロームブロック量が少ない　焼土が混入する　もろい
19 黒褐色土　ローム・焼土粒を少量含む
20 黒色土　全体的に真っ黒（炭化物を多量に含有しているためか）　焼土・ロームを含む
21 黒褐色土　粘土を含有　焼土粒・炭化物も含む　ロームは少ない
22 黒褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む　炭化物多い　重複の溝か
23 暗褐色土　ロームの微細粒を含む　粒子が細かくなめらか
24 黄褐色土　ロームブロック主体　炭化物も多い　焼土はほとんど含まれない
25 黒色土　炭化物主体の層　ロームも含むが全体的真っ黒　焼け跡か
26 黄褐色土　ロームブロックが多いがしまりが悪く、もろい
27 黒色土　溝に入り込んでいる炭化物層　炭化物の原型はほとんど留めないが真っ黒
28 明赤褐色土　焼土主体の層　ロームブロックも少量混入　固く焼けたブロックが多い
29 赤褐色土　焼土の層　暗赤褐色土の中に焼土粒・ブロックが多く入り炭化物も含まれる
30 暗黄褐色土　ロームの層　被熱部分もあるもろい層



第７図　第２号住居跡カマド、第２号住居跡出土遺物

第２号住居跡出土遺物観察表

NO	器　種	口径	底径	器高	残存率	胎　土	焼成	色調	特　徴
1	須恵坏	13.3	7.8	3.3	75%	白色針状・小礫	普通	暗灰色	回転ヘラ削り。南比企産
2	須恵坏	12.7	8.5	3.2	70%	白色針状・石英・小礫	不良	暗灰色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。東金子産
3	須恵坏	14.6	10.6	3.8	85%	白色粒・砂粒・小礫	良好	灰白色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。東金子産
4	須恵埦	16.9	8.8	7.0	45%	白色粒・黒色粒	普通	灰色	全面回転ヘラ削り。東金子産

第３号住居跡（第６図）

本住居跡は調査区北東部に位置する。遺構北側約１/４が調査区外にあり、西側で第２号住居跡と重複する。新旧関係は、第２号住居跡を切って第３号住居跡が形成されていることから、第３号住居跡のほうが新しい。平面形は東西にやや長い長方形プランを呈し、全体の規模は長軸長 3.5 m、短軸長 3.1 m、深さは 0.32 mを測り、第２号住居跡とほぼ同規模と推定される。主軸方向はＮ－105°－Ｅを指す。

床面は全体的に堅緻で、壁溝は南壁で確認された。柱穴は検出されなかった。

カマドは東壁に構築されていた。第２号住居跡と重複する遺構南側は貼床が施され、その下より第２号住居跡のカマド火床部が検出されている。

出土遺物は須恵器、土師器が出土しており、遺構覆土内から坏の完形品が出土している。1～5は須恵器坏である。1は底部が上げ底になっており、口縁部は外反している。底部は回転糸切り後周辺を指で均している、東金子産。2は器厚が全体的に均一で、体部は底部から直線的に立ち上がっている。底部は回転糸切りのみで、外面には半分欠損しているが、ヘラ記号「十」が描かれている、南比企産。3は湾曲している体部中位がかなり薄く、底部中央が若干厚い。口縁部は外反し、一部に煤が付着している。底部外面には墨書「福」が描かれている。底部は回転糸切りのみ、東金子産。4は器厚が全体的に均一で、内底部中央がへこんでいる。口縁部は外反し、外底部には半分欠損しているが、ヘラ記号「十」が描かれている。底部は全面回転ヘラ削り、南比企産。5は底部のみの破片である。器厚はかなり厚い。内面体部下位に「コ」と推測されるヘラ記号が描かれている。底部は回転糸切りのみ、南比企産。6、7は須恵器蓋である。6は鈕の有無は不明で、天井部に回転ヘラ削りがみられる、東金子産。7はボタン型の鈕を持ち、器厚はかなり厚い。鈕に墨書「巵？」が描かれ、天井部に回転ヘラ削りがみられる、南比企産。8は土師器台付甕である。脚の部分は欠損しており、体部下位から体部中位までしか残存していない。9は土師器甕の口縁部である。口縁部は「コ」の字状で、口唇部が垂直に立ち上がっている。おそらく体部中位で径が最大になると推測される。

第４号住居跡（第９図）

本住居跡は調査区東側に位置する。約１/３が調査区外にあり、平面形は不明であるが、北壁は長さ 3.6 mを測り、深さは 0.25 mである。主軸方向はおそらくＮ－113°－Ｅを指すと推測される。

床面は中央部分が堅緻であるが、壁溝付近は軟弱な貼床が認められた。壁溝は、検出部分では全周する。柱穴は検出されなかった。

カマドは東壁に構築されていたと思われるが、調査区外であるため検出されなかった。

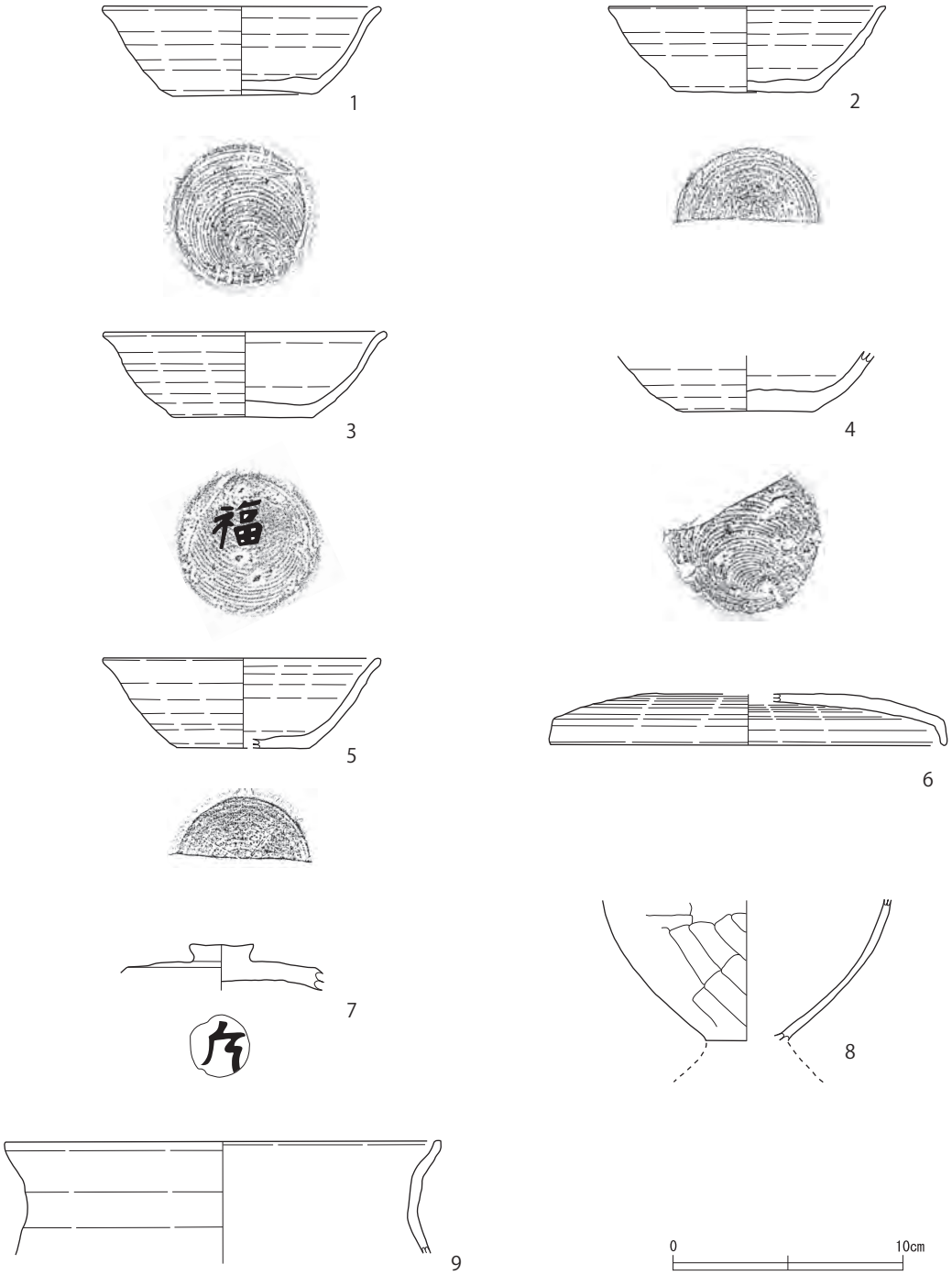
出土遺物は須恵器が出土している。1は須恵器坏である。器厚は底部が厚く、口縁部は外反している。底部は回転糸切りのみ、東金子産。2は須恵器埦である。器厚は全体的に均一で口縁部は若干外反している。口唇部内面が若干面になっている。底部は回転糸切りのみ、東金子産。3は須恵器蓋である。鈕なしで、返しには明確な爪先の跡がみえる。天井部は回転糸切りのみ、東金子産。

土壙

第１号土壙（第６図）

本土壙は第３号住居跡内で検出された。同遺構の床面を穿っている。規模は径 0.9 m、深さは 0.33 mを測る。特徴は、覆土内に多量の粘土が混入していたことである。

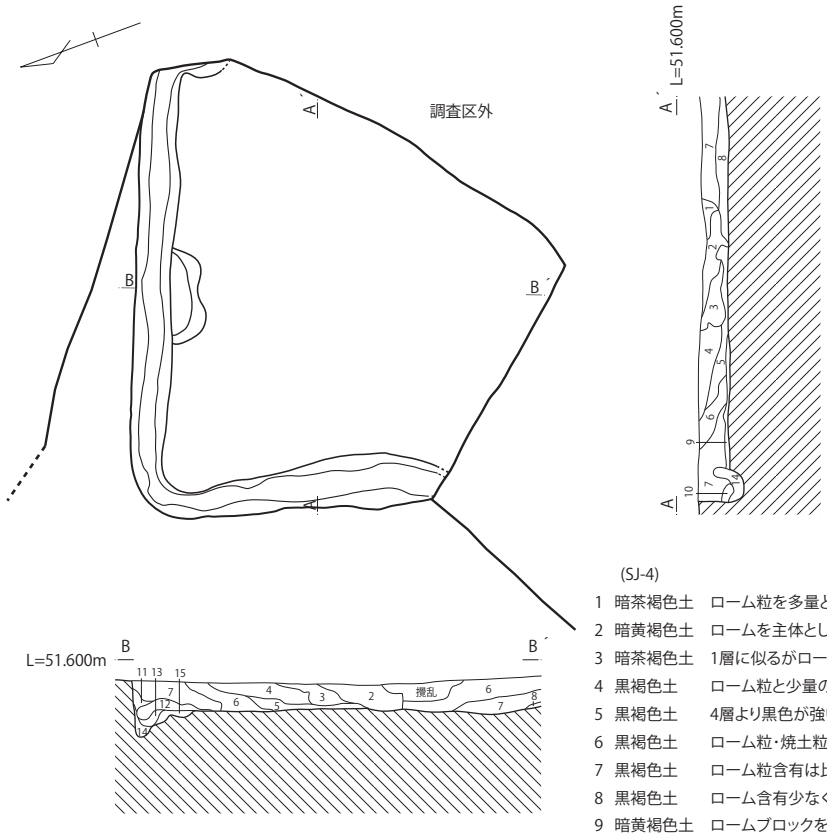
出土遺物は無く、遺構の性格等詳細は不明である。



第８図　第３号住居跡出土遺物

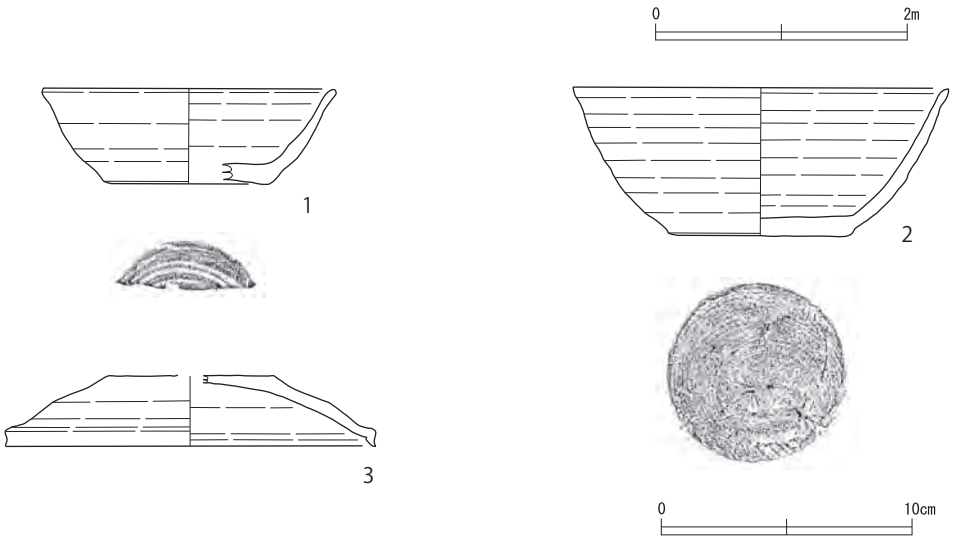
第３号住居跡出土遺物観察表

NO	器　種	口径	底径	器高	残存率	胎　土	焼成	色調	特　徴
1	須恵坏	12.0	6.1	3.9	100%	白色粒・小礫	良好	明灰色	回転糸切り。東金子産
2	須恵坏	(12.0)	(6.1)	3.8	50%	白色針状・小礫	良好	明灰色	全面回転ヘラ削り。底部ヘラ記号「十」。東金子産
3	須恵坏	(12.2)	6.0	3.7	80%	白色粒・赤色粒・小礫	不良	明褐色	回転糸切り。底部墨書「福」。東金子産
4	須恵坏	12.2	5.8	(1.9)	45%	白色針状・石英	良好	暗灰色	全面回転ヘラ削り。底部ヘラ記号「十」。南比企産
5	須恵坏	12.2	6.1	(2.9)	20%	白色針状・石英・砂粒	良好	灰色	回転糸切り。体部内側ヘラ記号「コ」。南比企産
6	須恵蓋	(17.2)	－	2.2	破片	白色粒・黒色粒	良好	灰色	鈕なし。東金子産
7	須恵蓋	－	－	(2.0)	破片	白色針状・白色粒・石英	良好	灰白色	ボタン鈕。鈕に墨書「巵？」。南比企産
8	土師台付甕	－	－	(6.1)	破片	白色粒・石英	不良	赤褐色	脚部欠損。
9	土師甕	(19.0)	－	(4.9)	破片	白色粒・赤色粒	普通	褐色	口縁部「コ」の字状。



(SJ-4)

1 暗茶褐色土　ローム粒を多量とロームブロックを少量含む
2 暗黄褐色土　ロームを主体とし黒色土が混ざる　かたい
3 暗茶褐色土　1層に似るがロームブロックを多く含む
4 黒褐色土　ローム粒と少量の焼土粒・炭化物を含有
5 黒褐色土　4層より黒色が強い　ロームブロックを含有
6 黒褐色土　ローム粒・焼土粒・炭化物を多く含む　ロームブロック少量混入
7 黒褐色土　ローム粒含有は比較的少ない　B´付近に焼土・粘土が多く混入
8 黒褐色土　ローム含有少なく黒色が強い
9 暗黄褐色土　ロームブロックを主体とし固くしまっている
10 暗茶褐色土　ローム粒を多量に含有　粘土・炭化物少量混入
11 暗茶褐色土　ローム粒と粘土を多量に含有
12 暗灰褐色土　粘土と焼土を多量に含む
13 暗灰褐色土　粘土を主体とする
14 暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロックを主体とする
15 暗黄褐色土　粘土・炭化物を多く含み粘質な層



第９図　第４号住居跡、第４号住居跡出土遺物

第４号住居跡出土遺物観察表

NO	器　種	口径	底径	器高	残存率	胎　土	焼成	色調	特　徴
1	須恵坏	11.6	6.7	3.8	35％	白色粒・砂粒	良好	暗灰色	回転糸切り。東金子産
2	須恵埦	(15.0)	7.4	5.9	40％	白色粒・黒色粒・石英・小礫	良好	灰白色	回転糸切り。東金子産
3	須恵蓋	(14.8)	(6.6)	2.8	破片	白色粒・黒色粒	良好	灰白色	天井部回転糸切り。東金子産

Ⅳ　城ノ越遺跡第 18 次調査

1　調査の経過と概要

調査はガソリンスタンド建設に伴うもので、平成 21 年 4 月 24 日に原因者から埋蔵文化財発掘届が提出された。これを受けて、市教育委員会直営で確認調査を平成 21 年 5 月 11 日から平成 21 年 5 月 14 日に実施した。

その結果奈良・平安時代遺構 7 基を確認し、原因者と協議した結果、 1 基のみ現況保存が不可能との事から、確認調査の一環として市教育委員会直営で発掘調査を、平成 21 年 6 月 4 日から平成 21 年 7 月 9 日にかけて実施した。調査の経過は以下のとおりである。

平成 21 年度

6 月 4 日（木）～ 6 月 10 日（水）

機材搬入。人力による表土除去作業。平安時代の住居跡 1 軒確認。

6 月 12 日（金）

本調査開始。遺構確認後、遺構の掘り下げを開始する。

6 月 15 日（月）～ 6 月 16 日（火）

遺構掘り下げ継続。床面までの掘り下げ終了。

6 月 17 日（水）

土層断面図作成。

6 月 18 日（木）～ 6 月 19 日（金）

ベルト、壁、壁溝を掘り出す。住居跡掘り上がり。

6 月 23 日（火）

調査区内清掃。全景及び遺構の写真撮影。

6 月 24 日（水）

遺構平面作成。

6 月 26 日（金）

カマド調査開始。断面図作成。

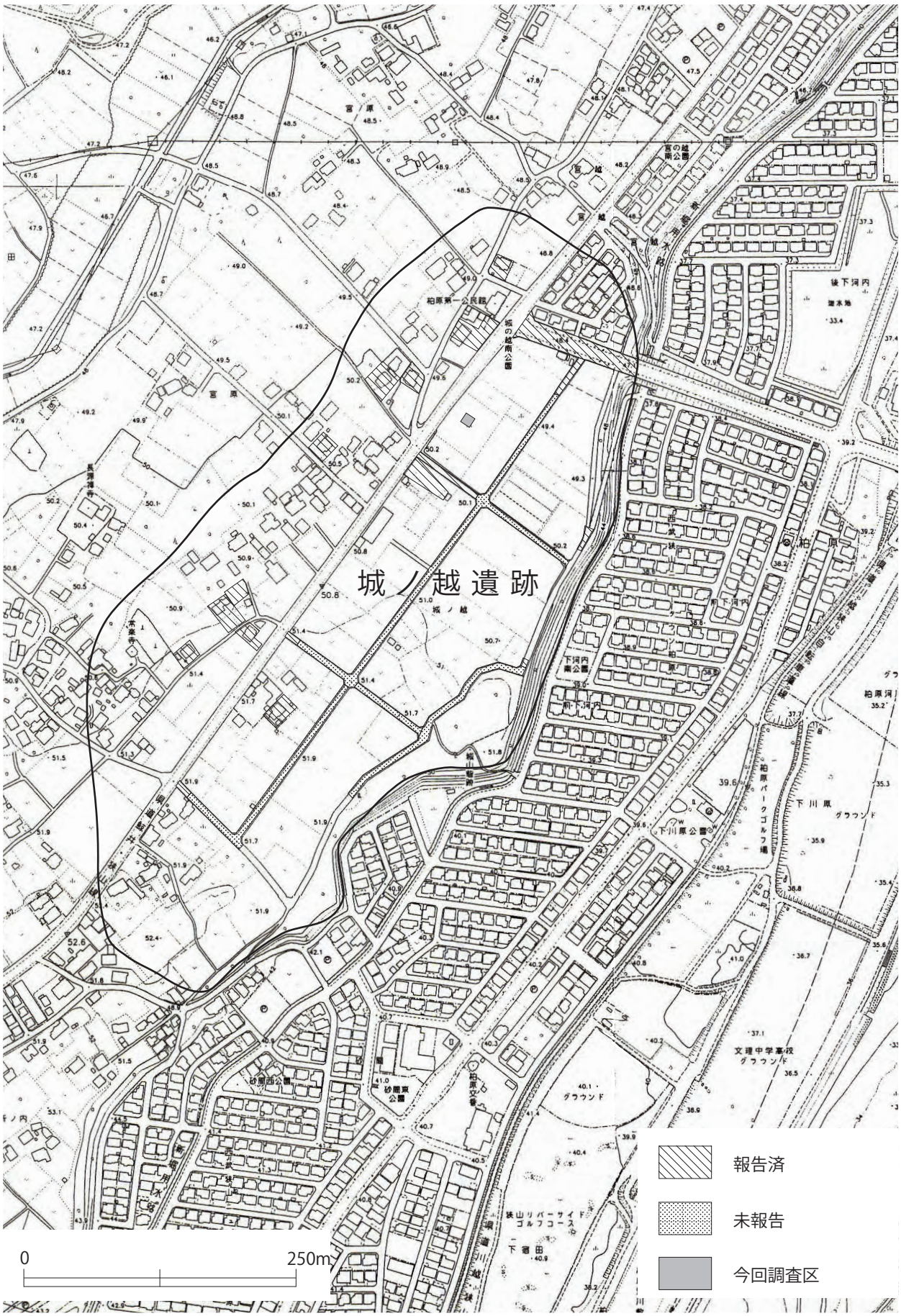
6 月 30 日（火）

カマド清掃後、写真撮影。

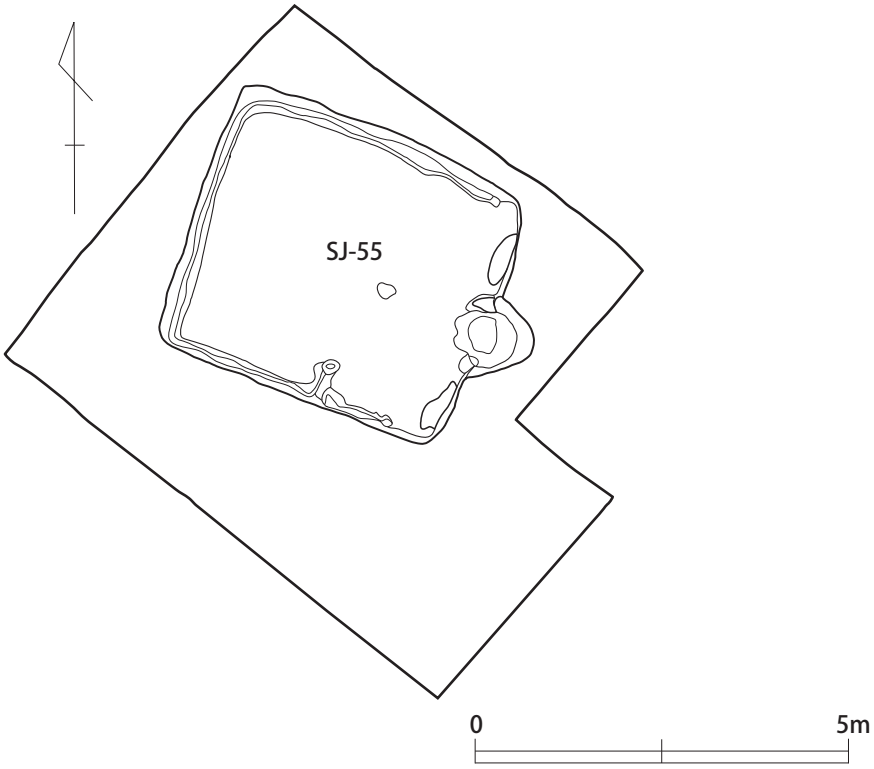
7 月 9 日（木）

調査区埋め戻し。機材撤収。調査終了。

調査の結果、検出された遺構は奈良・平安時代の竪穴住居跡 1 軒のみである。なお、遺構番号は昭和 52 年に実施された第 1 次調査からの通し番号で第 55 号住居跡となる。



第 10 図　城ノ越遺跡第 18 次調査区位置図



第 11 図　城ノ越遺跡第 18 次調査区全測図

2　検出遺構と出土遺物

住居跡

第 55 号住居跡（第 12 図）

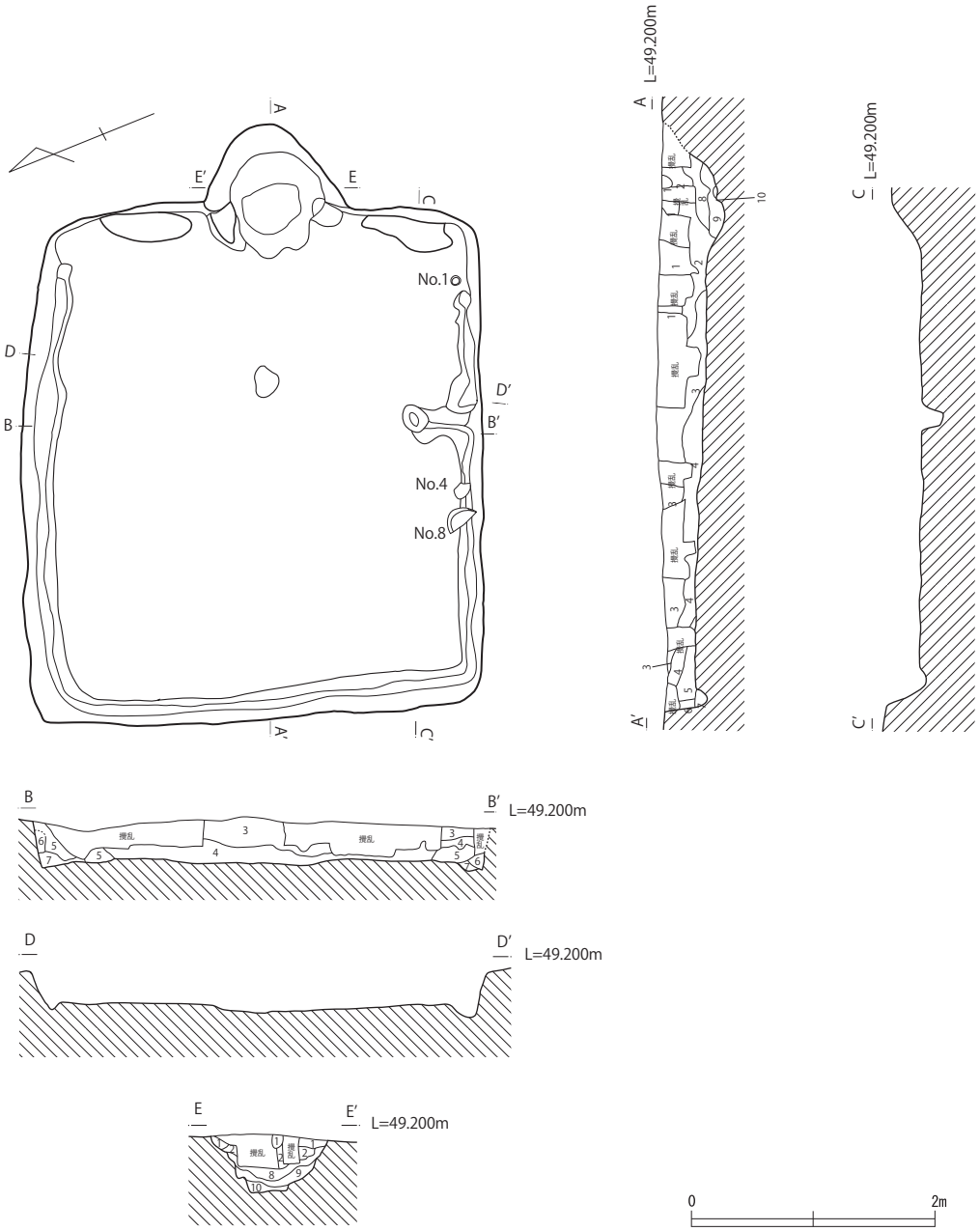
本住居跡は調査区中央に位置する。平面形は東西に長い長方形のプランを呈しており、全体の規模は長軸長 4m、短軸長 3.7m、深さ 0.30 ～ 0.35 mを測る。主軸方向は N － 113°－ E を指す。

床面は全体的に堅緻だが、中央にある炉跡を中心にした三方面が特に堅くなっている。壁溝はカマドのある東壁部分を除いて掘り巡らされている。

カマドは東壁ほぼ中央に位置し両袖の残存率は悪い。カマド両脇の壁には白色粘土が貼られており、棚状遺構が検出されている。

南壁中央付近に直径 2 m、深さ 0.16 mの土壙状遺構が検出されており、おそらく出入口施設が設置されていたのではないかと推測される。

出土遺物は須恵器や土師器が出土し、完形の須恵坏や土師器甕の口縁部が南壁に沿って出土している。1 ～ 6 は須恵器坏である。1 は器厚が底部で厚く、体部は薄くなっている。体部下位には底部を切り離す際の失敗痕がみえ､体部中位には墨書「舟」が描かれている。底部は回転糸切り後周辺を指で均している、東金子産。2 は器厚が底部中央で厚く、口縁部に向かい薄くなっている。口縁部は外反している。底部は回転糸切りのみ、東金子産。3 は器厚が全体的に均一で、底部がやや上げ底気味になっている。体部下位には底部を切り離す際の失敗痕がみえ、体部上位にはヘラで描いた跡があるが、欠損があるためヘラ記号



(SJ-55)

1 暗褐色土　ローム粒、粘土粒、焼土を多く含有　粘性あり

2 暗灰色土　粘土塊、黒色土、焼土を含有　粘性あり

3 黒褐色土　ローム粒、焼土粒、炭化物を多く含有　焼土が偏掘する場所あり

4 茶褐色土　多量のローム粒を含有　黄色が強く、ロームブロックも部分的に見られる　粘性あり　しまり良好

5 黒褐色土　ロームブロック、ローム粒が多く、焼土、炭化物を少量含有　しまり良好

6 暗黄褐色土　ロームと褐色土の混合層　しまり良好

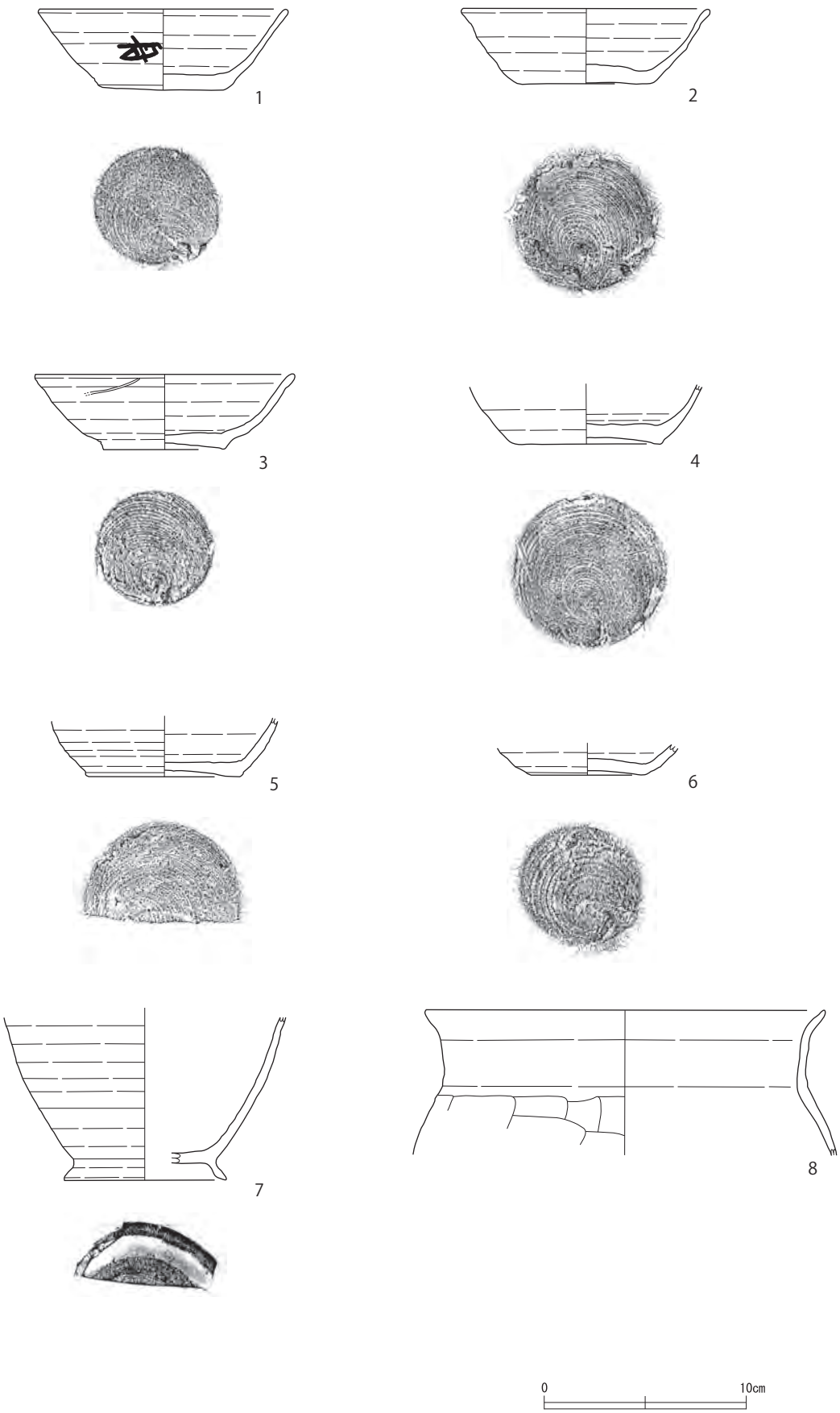
7 黄褐色土　ロームを主体とする

8 明赤褐色土　焼土を主体とし、粘土・炭化物が混在する

9 灰赤褐色土　灰色ががかった赤い層土　焼土を主体とする（灰層か？）　粘性あり

10 灰赤褐色土　第4層に似るが、ロームブロックを含有

第 12 図　第 55 号住居跡



第 13 図　第 55 号住居跡出土遺物

の全体像はみえない。底部は回転糸切りのみ、東金子産。4 は底部から体部下位までのもので、底部が厚くなっている。体部内面の湾曲が明瞭である。底部は回転糸切りのみ、東金子産。5 は底部から体部下位までの破片である。器厚は均一で、底部が上げ底になっている。体部外面は湾曲に立ち上がっているが、内面は直線的に立ち上がっている。底部は回転糸切りのみ、東金子産。6 は底部から体部下位までの破片である。器厚は均一で、底部がやや上げ底になっている。5 同様、体部外面は湾曲に立ち上がっているが、内面は直線的に立ち上がっている。底部は回転糸切りのみ、東金子産。7 は須恵器台坏甕の底部から体部中位までである。底部、体部の器厚は均一だが、脚の部分はかなり薄くなっている。脚と体部の接合面は丁寧に均されているが、多少爪先の跡がみえる。底部は回転糸切り、東金子産。8 は土師器甕の口縁部である。器厚は均一で、口縁部が「コ」の字状になっている。おそらく体部中位で径が最大になると思われる。削りは体部に施されており、削りを施した後に口縁部との境を指でナデ調整している。

第 55 号住居跡出土遺物観察表

NO	器　種	口径	底径	器高	残存率	胎　土	焼成	色調	特　徴
1	須恵坏	12.3	6.0	4.0	100%	白色粒・赤色粒・石英	良好	灰白色	回転糸切り。体部外面に墨書「舟」。東金子産
2	須恵坏	12.1	6.8	3.7	80%	白色粒・黒色粒	良好	明褐色	回転糸切り。東金子産
3	須恵坏	(12.8)	6.0	3.8	50%	白色粒・小礫	良好	淡灰色	回転糸切り。体部にヘラでの傷あり。東金子産
4	須恵坏	―	7.0	(2.8)	40%	白色粒・砂粒	良好	褐色	回転糸切り。糸切り失敗痕あり。東金子産
5	須恵坏	―	7.5	(2.9)	25%	白色粒・小礫	良好	暗灰色	回転糸切り。東金子産
6	須恵坏	―	5.6	(1.3)	破片	白色粒・赤色粒	普通	明褐色	回転糸切り。東金子産
7	須恵台付甕	―	(8.0)	(8.0)	破片	白色粒・小礫	良好	暗灰色	回転糸切り。脚と体部の接合は丁寧。東金子産
8	土師甕	(19.6)	―	(7.2)	破片	白色粒・黒色粒・石英・長石	普通	明褐色	口縁部「コ」の字状。

V　鳥ノ上遺跡第２次調査

１　調査の経過と概要

調査は市道建設に伴うもので、平成 22 年 3 月 1 日に原因者から埋蔵文化財発掘届が提出された。これを受けて、市教育委員会直営で確認調査を平成 22 年 3 月 11 日から平成 22 年 3 月 12 日に実施した。

その結果、奈良・平安時代遺構 3 基を確認した。原因者と協議した結果、現況保存が不可能との事から、市教育委員会直営で発掘調査を、平成 22 年 4 月 19 日から平成 22 年 5 月 12 日にかけて実施した。調査の経過は以下のとおりである。

平成 22 年度

4 月 19 日（月）

機材搬入。本調査開始。奈良・平安時代の住居跡 1 軒、土壙 1 基、道路状遺構 1 条確認。

4 月 20 日（火）～ 4 月 21 日（水）

遺構の掘り下げを開始する。

4 月 25 日（日）

遺構掘り下げ継続。床面までの掘り下げ終了。

4 月 26 日（月）

土層断面図作成。ベルトはずし。第 5 号土壙完堀。

4 月 27 日（火）

壁、壁溝を掘り出す。第 3 号住居跡完堀。

4 月 30 日（金）

調査区内清掃。全景及び遺構の写真撮影。

5 月 6 日（木）

遺構平面作成。

5 月 10 日（月）～ 5 月 12 日（水）

機材撤収。調査区埋め戻し。調査終了。

調査の結果、検出された遺構は奈良・平安時代の竪穴住居跡 1 軒、土壙 1 基、道路状遺構 1 条である。なお、遺構番号は平成 22 年に実施された第 1 次調査からの通し番号で第 3 号住居跡、第 5 号土壙となる。

２　検出遺構と出土遺物

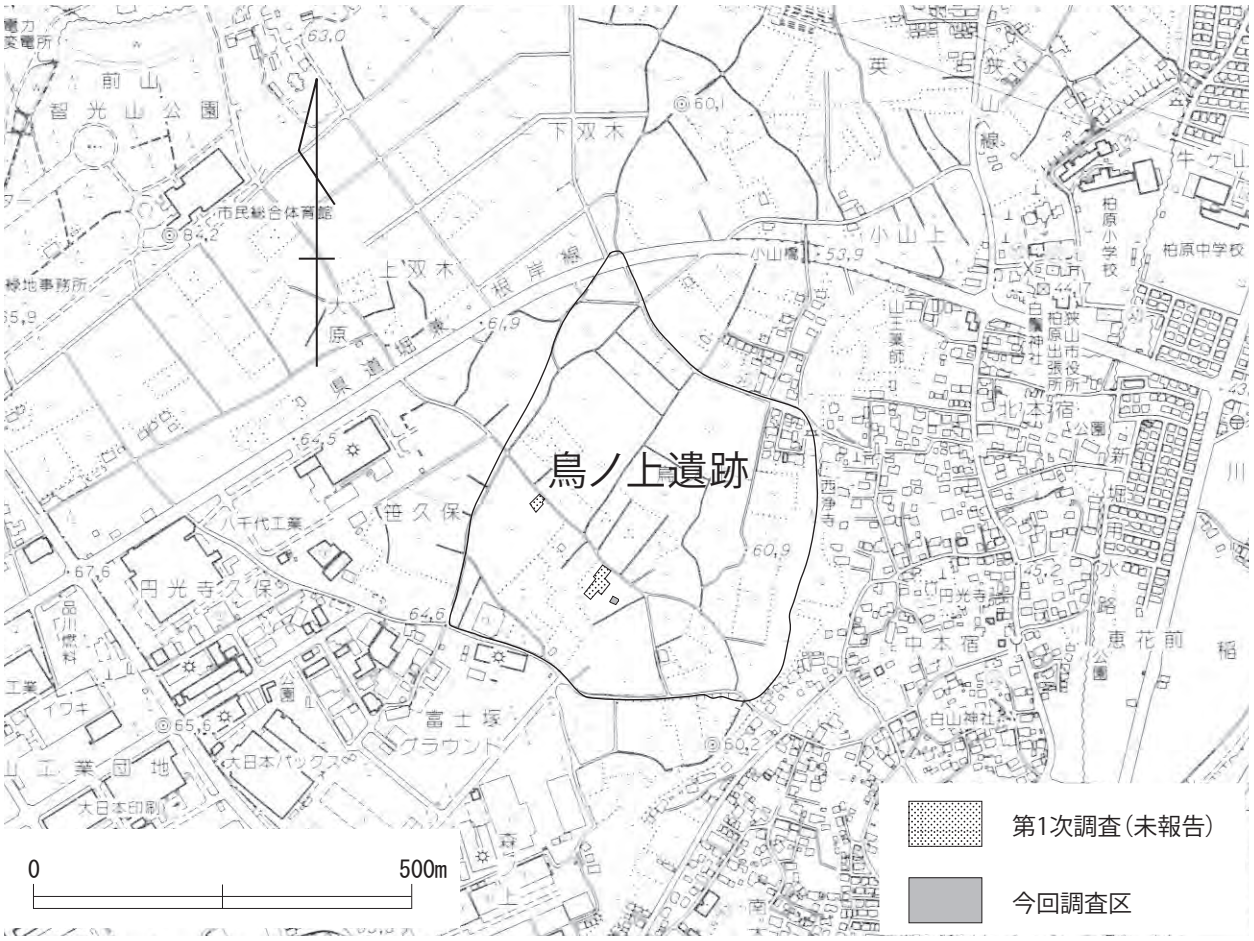
住居跡

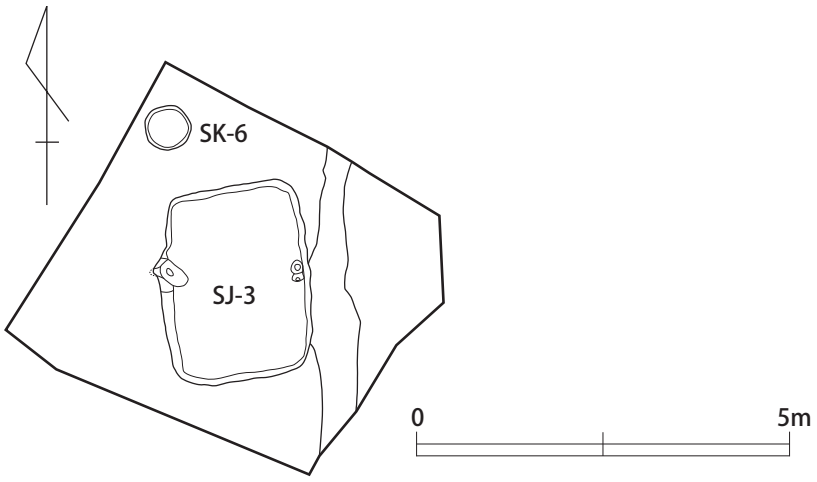
第 3 号住居跡（第 15 図）

本住居跡は調査区中央に位置する。平面形は東西に長い長方形のプランを呈しており、全体の規模は長軸長 5.1m、短軸長 4.1m、深さ 0.40 ～ 0.50 mを測る。主軸方向は不明である。

床面は全体的に軟質で、凹凸が所々で見られ、壁溝は検出されなかった。

カマドは西壁ほぼ中央に掘りかけの状態で検出されているが、かまど前面の土が堅緻であったため、恐らく作成途中で埋め戻した可能性が考えられる。

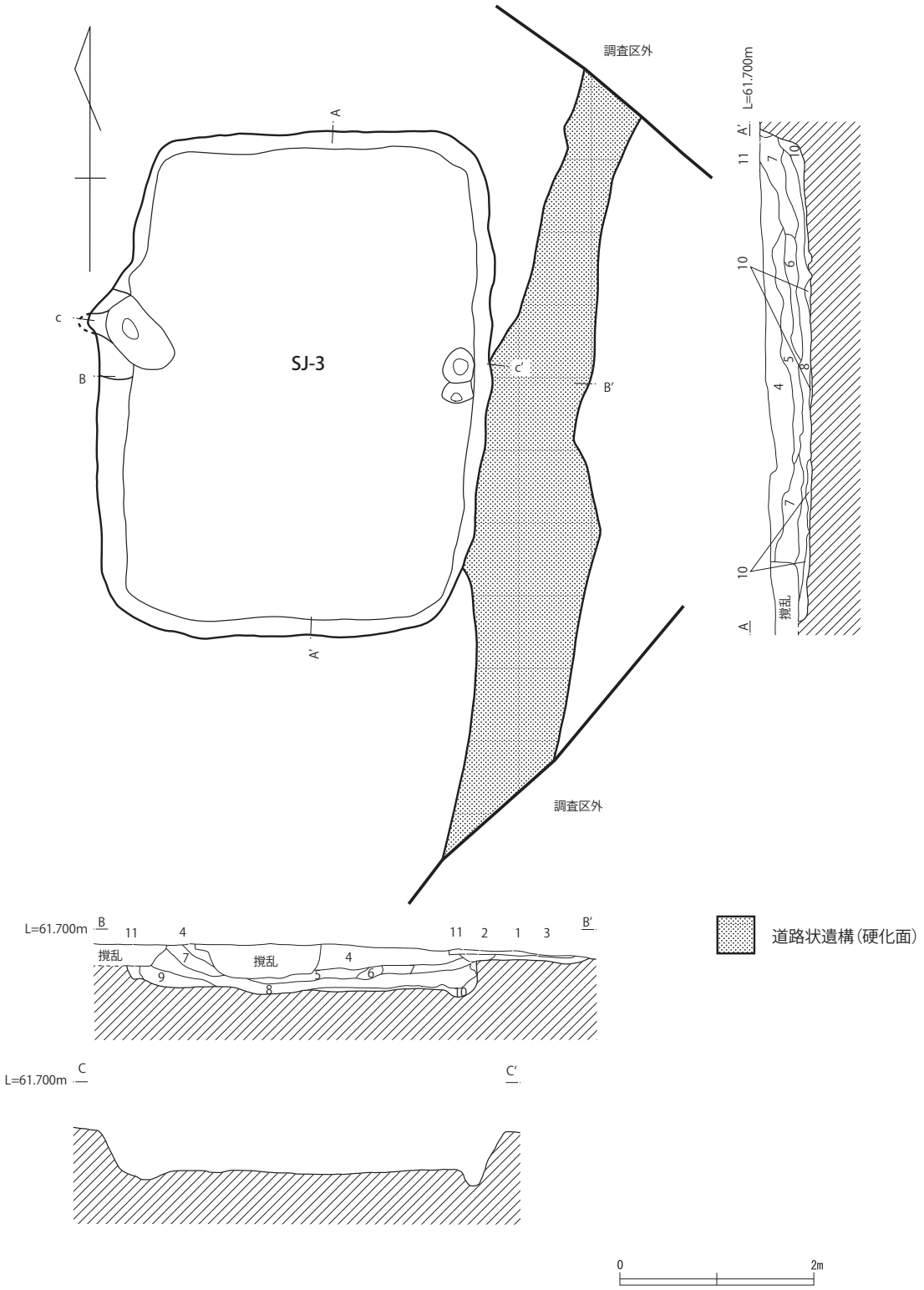




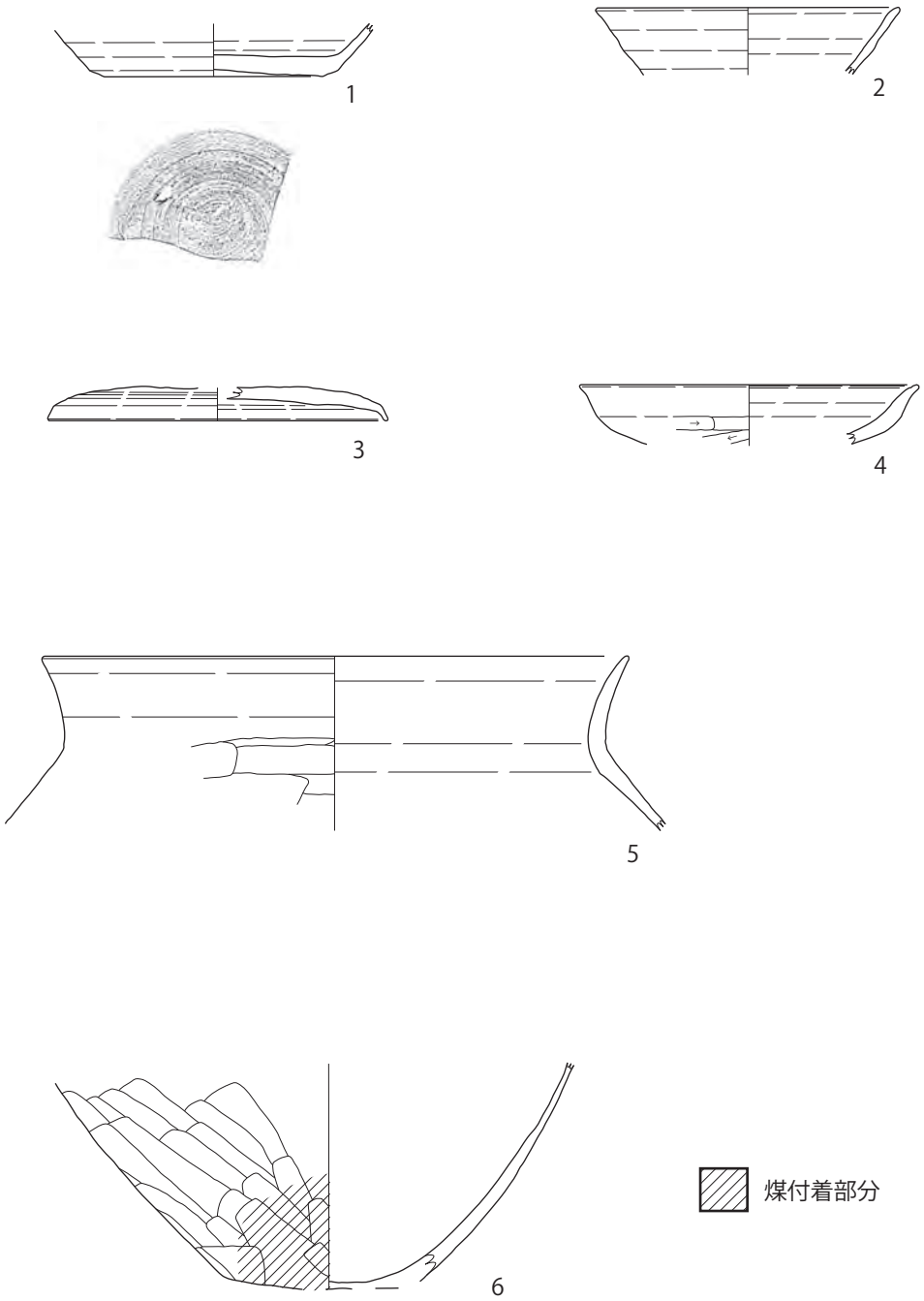
第 14 図　鳥ノ上遺跡第 2 次調査区位置図・全測図

東壁中央付近に直径約 0.35 m、深さ約 0.54 mの土壙状遺構が 2 基検出されており、おそらく出入口施設が設置されていたのではないかと推測される。

出土遺物は須恵器や土師器が出土している。1 ～ 3 は須恵器の破片である。1 は坏底部の破片である。底部は回転糸切り後周辺回転ヘラ削りが施されており、その後指で底部と体部の境を整形しているのが見て取れる。底部は厚味を持っているが、体部は薄くなっている。南比企産。2 は坏口縁部の破片である。器厚は薄く、口縁部は若干外反している。また、口唇部はややとがっており、つまみあげて整形されてい



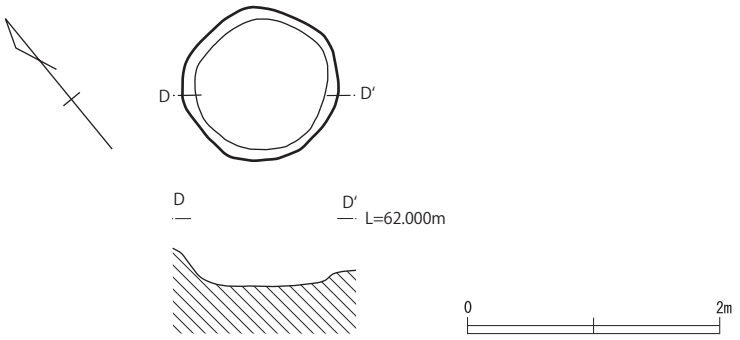
第 15 図　第 3 号住居跡、道路状遺構



第 16 図　第 3 号住居跡出土遺物

第 3 号住居跡出土遺物観察表

NO	器　種	口径	底径	器高	残存率	胎　土	焼成	色調	特　徴
1	須恵坏	―	(9.0)	(1.9)	破片	白色粒・白色針状・黒色粒・石英・小礫	良好	灰色	回転糸切り後周辺回転ヘラ削り。南比企産
2	須恵坏	(12.4)	―	(2.8)	破片	白色粒・黒色粒	良好	暗青灰色	口縁部がややとがる。東金子産
3	須恵蓋	(13.0)	―	(1.4)	破片	白色粒・黒色粒・赤色粒・石英・長石	普通	明赤褐色	鈕欠損。東金子産
4	土師坏	(13.8)	―	(2.4)	破片	白色針状・黒色粒・石英	普通	赤褐色	口縁部内側に爪先跡。南比企産
5	土師甕	(23.8)			破片	白色粒・黒色粒・石英・長石	不良	赤褐色	口縁部「く」の字状。
6	土師甕	―	(7.7)	(9.3)	25%	白色粒・砂粒・石英・長石	不良	赤褐色	外面に煤付着。二次焼成がひどい。



(SJ-3)

1　暗茶褐色土層　硬化面、路面、ブロック状を呈す
2　暗茶褐色土層　ローム粒を少量含有、硬い
3　暗黄褐色土層　粒子粗く、やや軟質、直下に硬化面
4　黒褐色土層　ローム粒を多量に、焼土・炭化物を少量含有、やや軟質
5　黒褐色土層　焼土を多量に含有、赤味が強い
6　暗赤褐色土層　第5層より多く焼土を含有、炭化物も顕著
7　黒褐色土層　ローム粒・焼土・炭化物・若干のロームブロックを含有
8　黒色土層　ローム粒・焼土・炭化物を少量含有、粘性あり、やや硬質
9　黒褐色土層　ロームブロックを多く含有するが、第8層に類似
10　暗黄褐色土層　ローム粒・ロームブロックを多量に含有、粘性あり
11　暗黄褐色土層　ロームを主体とする

第 17 図　第 6 号土壙

ることがわかる。東金子産。3 は蓋の破片である。器厚は全体的に厚いが、返し部分がかなり薄くなっている。鈕部分は欠損していて不明だが、天井付近に指ナデの調整痕があることから鈕が存在していたことは確かである。東金子産。4 は土師器坏の破片である。底部付近が欠損しているが、体部の湾曲具合から考えて丸底だと推測する。口縁部は若干鬼高期の様相を残しており、口唇部内側に爪先でつけられた溝が走っている。南比企産。5 は土師器甕の口縁部である。口縁部は「く」の字状を呈しており、最大径は肩部だと推測される。6 は土師器甕の底部である。外面に広範囲に煤が付着しており、内部は二次焼成が進んでもろくなっている。

道路状遺構（第 15 図）

本遺構は調査区南側から北側にかけて検出されている。途中、第 3 号住居跡と重なり、それを破壊している。道幅は 0.5 m～ 1.2 mを測る。

出土遺物はなく、遺構の詳細な時代は不明である。

土壙

第 6 号土壙（第 17 図）

本土壙は調査区北側に位置する。平面形は直径約 1.1 mの円形を呈す。深さ 0.10 m～ 0.30 mを測る。特徴は若干壁がオーバーハングしていることである。

出土遺物はなく、遺構の性格等詳細は不明である。

Ⅵ　結語

御所の内遺跡第6次調査

御所の内遺跡では、昭和58年の第1次調査以降、6回に渡る発掘調査が実施されている。第1から第5次調査においては遺構が検出されず、今回の第6次調査により初めて奈良・平安時代住居跡4軒、土壙1基が検出された。ここでは各遺構の年代と出土遺物の産地傾向、遺跡の性格について簡潔に述べたい。

今回報告した4軒の住居跡は、出土遺物から第1号住居跡が9世紀第1四半期、第2号住居跡は8世紀第3四半期から第4四半期、第3号住居跡は、8世紀第3四半期から9世紀第3四半期である。ただし、第3号住居跡は第2号住居跡を破壊して造られているため、第2号住居跡の遺物が混入する可能性がある。このことを鑑みるに、第2号住居跡は8世紀末に建てられたものであり、第3号住居跡は9世紀初頭に建てられたものではないかと推測できる。第4号住居跡は、9世紀第2四半期と比定することができる。第1号土壙については出土遺物がないため遺構の詳細等性格は不明である。

出土遺物の産地傾向は主に東金子産が中心で、一部南比企産が混じっており、この地域の特色どおりの傾向を示している。

遺跡の性格は、今回の調査のみでは断言できないが、本調査区の北東には城ノ越遺跡が広がり、さらに北に向かうと宮ノ越遺跡が広がっていることから、宮ノ越遺跡を北端とする奈良・平安時代の大規模集落の一部ではないかと推測できる。大規模集落と仮定すると入間川の段丘沿いに全長500 m以上もの集落になる可能性があるので、同地域での今後の更なる調査に期待したい。

城ノ越遺跡第18次調査

城ノ越遺跡では、昭和52年の第1次調査以降、18回に渡る発掘調査が実施されている。今回の発掘調査は、事前の確認調査で奈良・平安時代住居跡6軒、掘立柱建物跡1棟が検出され、うち1軒のみが現状保存が不可能なため調査にいたった。ここでは各遺構の年代と出土遺物の特徴・産地傾向、遺跡の性格について簡潔に述べたい。

今回報告した1軒の住居跡は、出土遺物から9世紀前半と比定することができる。出土遺物の最大の特徴は、墨書土器「舟」が出土していることである。県内では出土例がなく、全国でも出土例が少ない珍しい墨書である。この墨書土器については、後述で大東文化大学の准教授である宮瀧交二氏に見解を伺っているのでそちらを参照していただきたい。出土遺物の産地傾向は主に東金子産が中心で、一部南比企産が混じっており、この地域の特色どおりの傾向を示している。

遺跡の性格としては、詳細は不明だが、今までの調査結果から集落の住居配置に傾向がある可能性がある。その傾向は、入間川に対して住居が平行に何列かに分かれて存在しているということと、列ごとに時期が近似しているということである。このことは、現在報告されているものからの推測であり、今後、未報告の調査結果についても当てはまるのかを確認していかなければならない。また、前述の御所の内遺跡第6次調査の結語にも述べたように、北側に隣接する宮ノ越遺跡と南側に隣接する御所の内遺跡との大規模集落の可能性もあるため、両遺跡との関連性、集落の構造、時期についても検証していかなくてはならないと考える。

鳥ノ上遺跡第2次調査

鳥ノ上遺跡では、平成21年度の第1次調査以降、2回に渡る発掘調査が実施されている。第1次調査は未報告だが、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、溝1条、土壙4基が検出されている。特に掘立柱建物跡は2間×7間西庇付と巨大で、どのような用途に使用されていたのかが注目される。

今回の発掘調査では竪穴住居跡1軒、道路状遺構1条、土壙1基が検出されており、それぞれの遺構の詳細や年代についてここでは述べたい。

第3号住居跡は、西側にカマドの存在が確認されているが、使用された痕跡はなく、完全に掘りあがった状態ではなかった。また、カマド前面の土が堅緻であったことから作成途中に埋め戻した可能性が高い。住居跡自体も床面が軟質で凹凸が激しく、硬化面があまり見られないことや、出土遺物量が圧倒的に少ないことから作りかけの住居跡の可能性がある。遺構の年代は、出土遺物から8世紀第2～3四半期と比定でき、また第3号住居跡フク土中から出土した須恵器甕の破片が第1次調査第1号住居跡ふく土から出土した須恵器甕の破片と合致したことから、両方の住居跡が同年代に遺棄されたことが判明した。第1次調査は現在整理作業中だが、出土した遺物を観察するに、南比企産の須恵器が多く、年代は8世紀第2四半期程度と推定されることから、市内の奈良・平安時代の集落としても古い部類に入る。

道路状遺構は第3号住居跡を破壊して通っている。このことから、道路状遺構は第3号住居跡が埋没した後に敷いたことがわかる。また、硬化面が2層になっていることから、道として機能しているうちに土が堆積し、堆積後も道として使用していたことが伺える。さらに、周辺地形や、調査区の断面観察の結果、埋没谷の縁を通っていたと推測できる。

第5号土壙は、出土遺物はなく、遺構の詳細等性格は不明である。

鳥ノ上遺跡は第1・2次調査および、周辺の確認調査によって、近接する森ノ上遺跡の集落とは別の集落であることが判明した。また、今回の2回の発掘調査において集落の南端一部が検出されたに過ぎない。集落の中心部と予測される遺跡北側部分の大規模開発の可能性が高いため、集落の全容が解明される可能性は高く、今後の発掘調査に期待したい。（三ツ木）

〈引用・参考文献〉

石塚和則　1997　『城ノ越遺跡　第9～11次調査』　狭山市埋蔵文化財報告第20集

石塚和則　2000　『宮ノ越遺跡　第8次・城ノ越遺跡　第12・13次調査』
狭山市埋蔵文化財報告第21集

石塚和則　2001　『城ノ越遺跡　第7・8次調査』　狭山市埋蔵文化財報告第23集

小渕良樹　1985　『城ノ越遺跡　第2・3次調査　ほか』　狭山市文化財報告10

埼玉大学考古学研究会　1978　『城ノ越遺跡―国分期集落址の調査―』　城ノ越遺跡調査会

酒井清治　2002　『古代関東の須恵器と瓦』　同成社

渡辺一　他　1988　『鳩山窯址群Ⅰ』　鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

渡辺一　他　1990　『鳩山窯址群Ⅱ』　鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

安井智幸　2005　『城ノ越遺跡　第15次調査』　狭山市遺跡調査会報告書第15集

狭山市城ノ越遺跡第55号竪穴建物跡出土の「舟」と記された墨書土器について

宮瀧　交二

はじめに

狭山市城ノ越遺跡第 55 号竪穴建物跡から出土した「舟」と記された墨書土器は、東金子窯で生産された須恵器坏であり、その製作年代は 9 世紀前半頃と思われる。「舟」の文字は、日頃から文字を書き慣れていると思われる人物による勢いのある行書体である。

「舟」字の意味については様々な可能性があるが、『和名類聚抄』が載せる入間郡及び高麗郡の郷名等に「舟」字は用いられておらず、地名である可能性は低いと思われる。また、人名の一部である可能性も否定することが出来ない。しかしながらそのような中、現時点では城ノ越遺跡の立地条件、すなわち本遺跡が入間川の左岸、現河道から直線距離にして約 650 mの場所に位置していることから、「舟」字が文字通り船舶を指す可能性が高いことを指摘しておきたい。

1　日本古代の「舟」

この貴重な墨書土器を歴史資料として評価するためには、予め確認しておかなければならない点がいくつかある。その一つが日本古代における「舟」字に対する認識である。ちなみに『広辞苑』(第六版)で「ふね」を検索すると「舟」字と「船」字が併記されており、更に「「舟」は、手でこぐ小型のものに使うことが多い」と記されている。すなわち現代では、その規模から「舟」字と「船」字が使い分けられているようであるが、これを安易に日本古代の人々の「舟」字に対する認識に重ねてしまうことだけは避けなければならない。以下、日本古代における「舟」字の認識から検討を始めてみたい。

先ず、奈良時代の社会を規定していた養老律令の本文であるが、基本的には「船」字が用いられている中で、管見の限り「舟」字は僅かに 4 ヵ所で用いられているにすぎない。律では、職制律御幸舟船条がこれにあたるが、ここに登場する「舟船」は、一般的な船舶を示す語であろう。令では、①職員令摂津職条の大夫の職掌の中の「検校舟具」、②同令大宰府条の大工の職掌の中の「舟？」、③同令主船司条の正の職掌の中の「舟？」である。注目すべきは③であり、官司名が「主船司」であるにもかかわらず、正の職掌の表記には「舟？」とあるように「舟」字が用いられているのである。換言すれば、令の本文では、船舶全般を基本的には「船」字で表すことになっていたのであるが、③をはじめとする 3 ヵ所では、きわめて意識的に「舟」字が用いられているとみることが出来よう。律令中におけるこの 2 文字の使い分けについて、今日、日本古代史研究者の律令研究の底本となっている日本思想大系本『律令』の解説は、特に言及していないが（井上光貞・関晃・土田直鎮・青木和夫校注『律令』岩波書店、1976 年。職員令の解説担当は青木和夫氏)、以下に述べるように奈良時代の基本史料である『続日本紀』［文武天皇元（697）年から延暦 10（791）年までの正史］における「舟」字の使用状況は極めて特徴的である。

『続日本紀』では、人名を除けば、「舟」字が 9 回登場するが、新羅の船舶を指す場合が 5 回、渤海の船舶を指す場合、諸蕃の船舶を指す場合、唐人が進上した船舶を指す場合、亡くなった先帝（聖武天皇）が冥界で乗船する「智海之慧舟」の場合が、それぞれ各 1 回である。冥界の船舶を指す 1 例を除けば、いずれも対外関係記事中での使用である。また勅・勅書中における使用が 5 回、新羅使・新羅王子の奏上中に

おける使用が３回、その他が１回である。以上の分析結果を総括すれば、『続日本紀』、すなわち奈良時代の律令国家は、天皇または外国使が外国船舶を指す場合に限って「舟」字を使用すると認識していたことが明らかであり、「舟」字が国内の海上・河川交通において日常的に周航していた船舶を指す文字ではなかったことが判明する。

また、城ノ越遺跡の墨書土器が使用された平安時代に、この奈良時代以来の文字の使い分けが引き続いて継承されていたか否かは判然としない。東京大学史料編纂所の「『平安遺文』フルテキスト・データベース」から、平安時代の古記録・古文書を収めた『平安遺文』中における「舟」字の使用例を検索してみたところ、128 例中 100 例が編纂史料中の使用例であり、実際の文書中での使用例は僅かに 28 例であった。この 28 例には「舟」字を用いた僧侶名等も含まれており、船舶を指す事例は 10 数例にとどまった。すなわち、平安時代においても基本的には「舟」字の使用は限定されており、国内の海上・河川交通において日常的に周航している船舶を指す一般的な文字として広く認識され使用されていたとは容易には言い難いのではないかと思われる。

尤も、こうした公の世界を離れた在地社会にあって、この「舟」「船」という２つの文字が厳密に使い分けられていたか否かは判然としない。「舟」字を記した古代の墨書土器は、宮城県多賀城市山王遺跡、新潟県上越市今池遺跡、長野県塩尻市俎原遺跡、長野県上田市堂西遺跡、石川県能美郡辰口町辰口西部遺跡、奈良県橿原市藤原京跡等の複数の遺跡からも出土しており（「出土文字資料データベース－墨書・刻書土器編－」平成 11 ～ 13 年度科学研究費補助金［基盤研究 B2］古代文字資料のデータベース構築と地域社会の研究、研究代表者・吉村武彦［明治大学文学部教授］、2002 年）、むしろ在地社会にあっては、両字が通用していた可能性も考えられよう。

２　古代埼玉の津と城ノ越遺跡

さて、城ノ越遺跡から出土した「舟」と記された墨書土器が、入間川を周航していた船舶を指すと仮定した場合、次に考えなければならないのが、城ノ越遺跡の性格である。ここで留意しておかなければならないのが、近年、全国各地でその存在が確認されはじめている津、すなわち港の問題である。既に別稿で検討したように、古代の埼玉でも河川交通が重要な位置を占めていたことは明らかであり（拙稿「古代東国における物流と河川交通」『古代交通研究』6、1997 年）、北武蔵地域を流れる複数の河川にあっても、数多くの津が機能していたであろうことは想像に難くない。

歴史地理学の分野から古代東国の水上交通関係地名を検討した中村太一氏は、埼玉県内には、①埼玉津（『万葉集』14-3380）、②男衾郡榎津郷（『和名類聚抄』）、③足立郡堀津郷（和名類聚抄』）といった３ヵ所の津に関わる地名が確認され、①は現行田市付近、②は現鴻巣市付近、③は現寄居町付近といった、現荒川・元荒川付近に比定することが出来ることを指摘した（中村太一「古代東国の水上交通－その構造と特質－」『古代王権と交流２　古代東国の民衆と社会』名著出版、1994 年）。

また、井上尚明氏は埼玉津についての検討を行い、これまでに全国で発掘調査された港湾遺跡・埠頭遺構の検討を踏まえた上で、行田市築道下遺跡もこのような性格を有する遺跡であることを確認し、同遺跡が埼玉津である可能性を提起した（井上尚明「さきたまの津を探る」『埼玉県立史跡博物館紀要』創刊号、2007 年）。

更に、さいたま市西区の宿宮前遺跡からは、平安時代の須恵器蓋に「川津」と記された墨書土器が出土

している。加えて同遺跡に隣接する根切遺跡同遺跡は、現荒川の旧流路である鴨川に面した遺跡であるが、古代の船着き場とみられる遺構が検出されており、古代埼玉の具体的な津の姿が解明された貴重な調査事例である（さいたま市立博物館『第 21 回企画展　遺跡から見る奈良・平安時代のさいたま－大久保領家遺跡と氷川神社東遺跡－』、2010 年）。このように、少しずつではあるが、古代埼玉の津の姿が具体的に解明されはじめているのである。

まとめにかえて

このように、近年、埼玉県内でも、古代の河川交通の要衝であった場所に設けられていた港湾施設である津に関する研究が加速しつつある。今回、城ノ越遺跡から出土した「舟」字を記した墨書土器は、城ノ越遺跡あるいはその隣接地に、平安時代、入間川の津が存在していた可能性を提起する貴重な資料である。その実態の解明作業は、今後の城ノ越遺跡とその隣接地の発掘調査の進展に伴って徐々に明らかになるものと思われる。今後の調査の進展に期待したい。

また、本稿では紙幅の関係から、前掲の「舟」字を記した古代の墨書土器を出土した全国の諸遺跡について検討を加えることが出来なかった。今後、これらの遺跡の立地を確かめ、発掘調査によって得られた成果を分析して遺跡の性格を詳細に検討することが出来れば、おそらくこれらの遺跡もまた、海上交通または河川交通との関与がうかがわれる遺跡であることが明らかになるのではないだろうか。他日を期して検討したい。

最後に、この貴重な資料を検討し、古代埼玉の河川交通を再検討する機会をいただいた狭山市教育委員会の石塚和則、三ツ木康介両氏に記して感謝申し上げたい。

附篇　市内遺跡確認調査

教育委員会で実施し、有用な資料が出土した平成７年度の富士塚遺跡確認調査と平成 19 年度の中原遺跡確認調査について紹介する。

各調査区の所在地、調査面積等は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	査面積	調査期間	調査原因	調査結果
富士塚遺跡 (県遺跡番号 22-009)	狭山市柏原字富士塚 291 － 3	995㎡	070824	駐車場建設	遺構なし 遺物あり
中原遺跡 (県遺跡番号 22-025)	狭山市入間川字沢久 保 865-1 外	4379㎡	190111 ～ 190117	福祉施設 建設	遺構なし 遺物あり

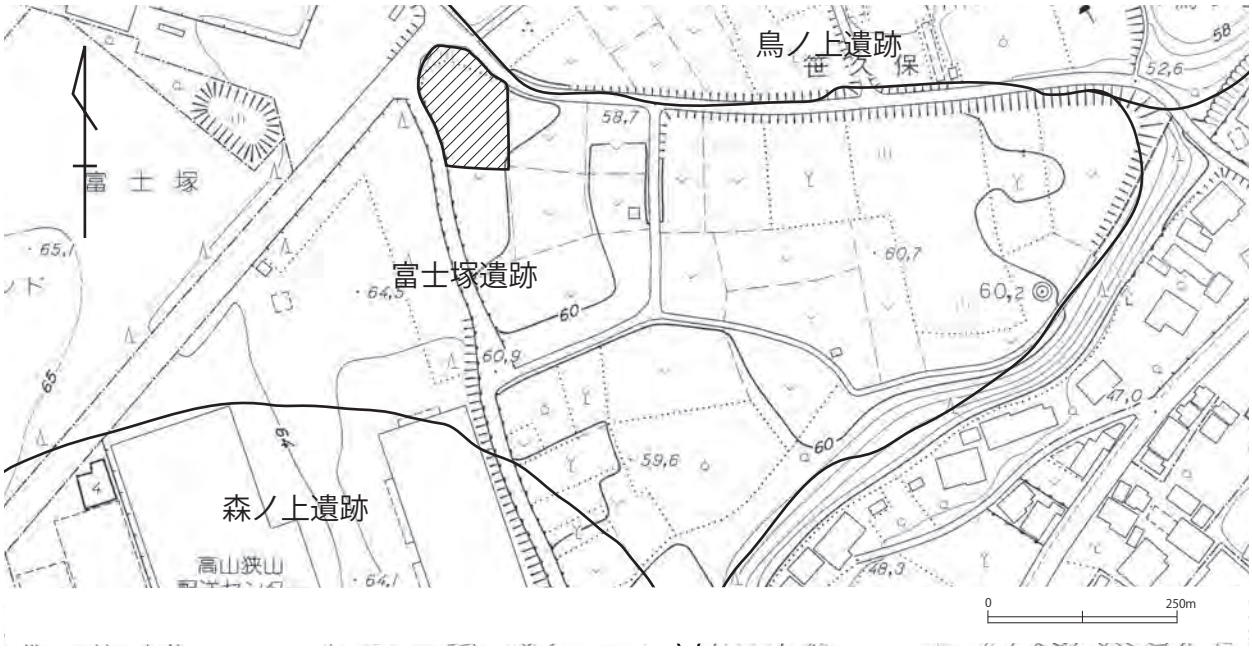
1　富士塚遺跡の調査

本遺跡は、入間川左岸の台地上に立地し、西武新宿線狭山市駅から北西に２km の地点に所在する。遺跡の規模は約 450 m×約 210 m、面積にしておおよそ 56,000㎡を測る。遺跡の主な年代は、縄文時代中期、奈良・平安時代の複合集落遺跡である。遺物の散布状況は縄文時代が東端部に集中し、奈良・平安時代は全体的に分布している。

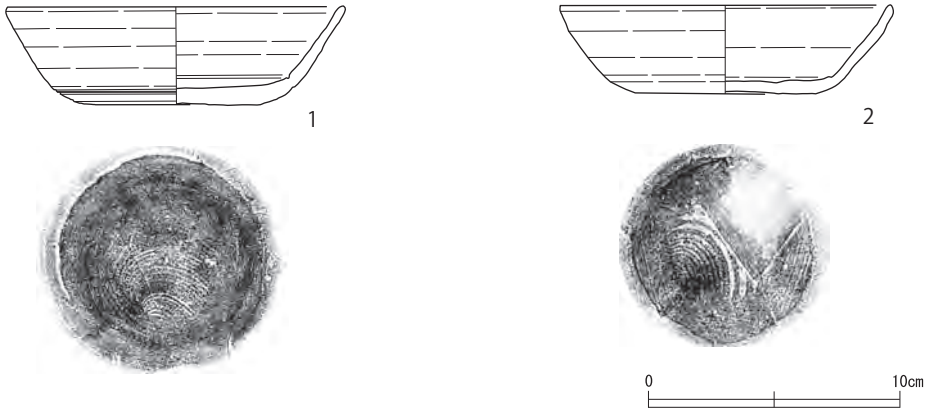
遺跡をのせる台地は入間川に面し、沖積地との比高差は約 12m を測る。台地上は概ね平坦であるが、西から東にかけてゆるく傾斜している。遺跡の南東端には深い谷が入り込んでいる。

現在のところ、第１次調査のみが行われ、奈良・平安時代の住居跡が２軒検出されている。

今回報告するのは平成７年度に行われた確認調査についてである。遺構は検出されなかったが、完形に近い須恵器坏が２点出土している。１は器厚が全体的に均一で、体部が底部から垂直に立ち上がって



第 18 図　富士塚遺跡確認調査位置図



第 19 図　富士塚遺跡確認調査出土遺物

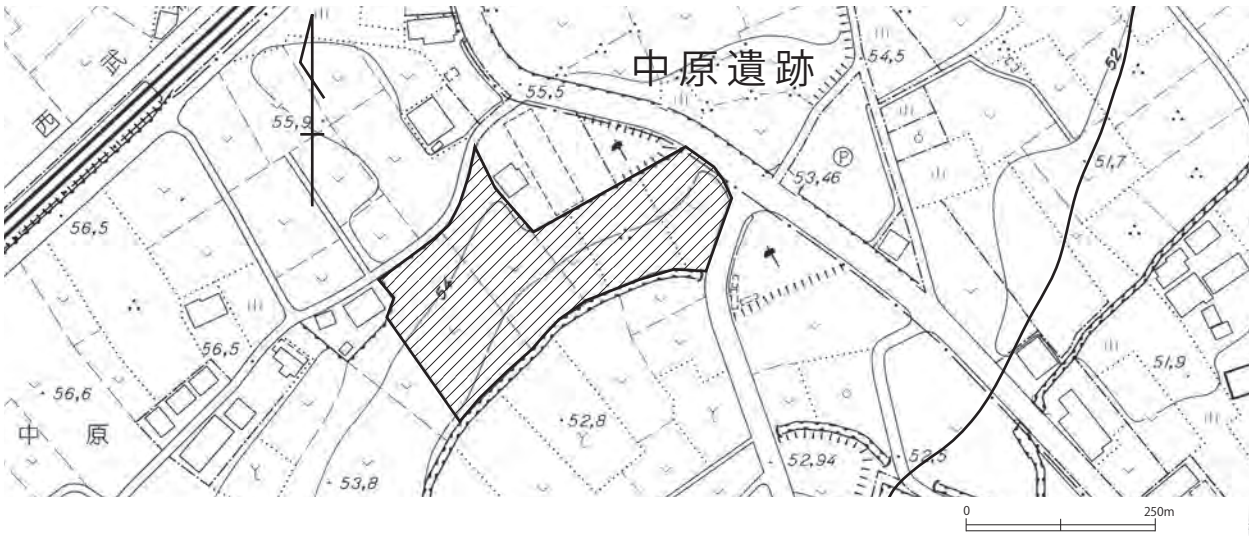
富士塚遺跡確認調査出土遺物観察表

NO	器　種	口径	底径	器高	残存率	胎　土	焼成	色調	特　徴
1	須恵坏	11.6	6.7	3.8	35%	白色粒・砂粒	良好	暗灰色	回転糸切り。東金子産
2	須恵坏	(15.0)	7.4	5.9	40%	白色粒・黒色粒・石英・小礫	良好	灰白色	回転糸切り。東金子産

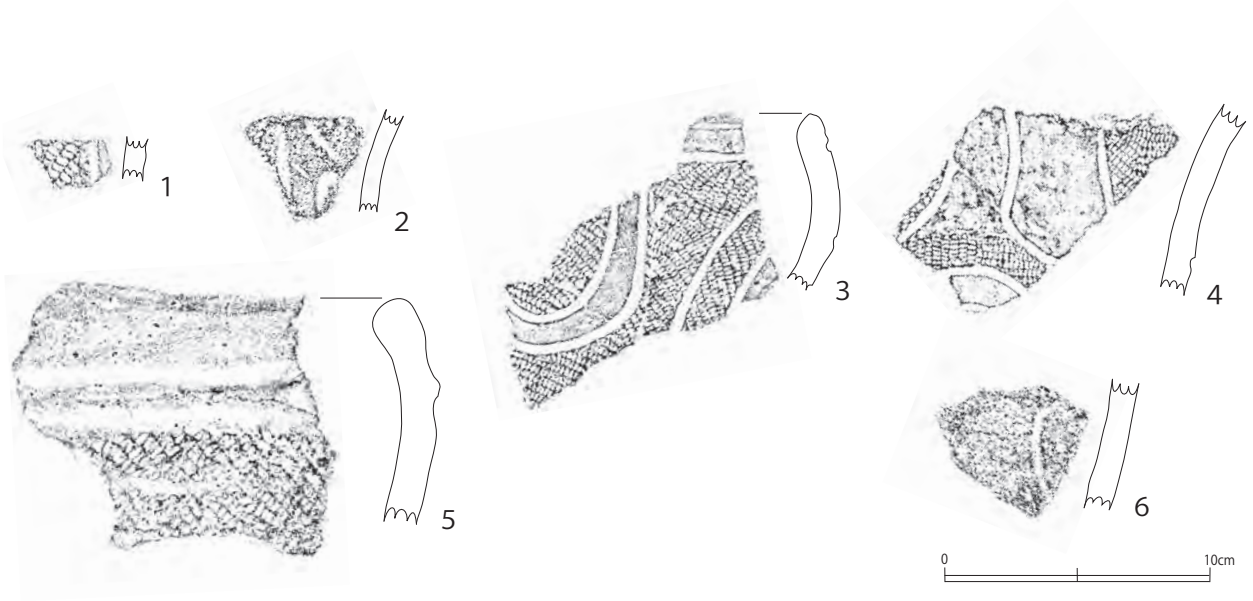
いる。外面体下部に爪先で付けられたような沈線が 2 本存在する。内底部と体部の接点よりやや上に爪先手法が施されている。底部は回転糸切り後周辺回転ヘラ削り、東金子産前内出系。2 は器厚が全体的に均一で、体部が底部から垂直に立ち上がっている。口唇部が若干内湾し垂直気味になっている。内底部と体部の接点には爪先手法が施されている。底部は回転糸切り後周辺手持ちヘラ削り、東金子産前内出系。

2　中原遺跡の調査

本遺跡は、狭山市狭山に所在する縄文時代早期から後期および奈良・平安時代の集落遺跡で、西武新宿線狭山市駅より北東へ、直線距離にして 1.5㎞付近に位置する。遺跡のほぼ中央、南西から北東にかけて西武新宿線が走る。本遺跡は入間川東小学校付近に水源を持つ久保川に開析された河岸丘の左岸で、鉄道の東側は野菜畑や麦畑の田園風景が広がり、西側は徐々に開発が進み家屋が点在している。分布調査から推定される遺跡範囲は 880 × 370 mで、遺跡内の標高は北側が 52 m、南側が 58 mで、遺跡面は若干



第 20 図　中原遺跡確認調査位置図



第 21 図　中原遺跡確認調査出土遺物（縄文時代）

南に傾斜している。

現在のところ県埋蔵文化財事業団が 2 回、市教育委員会が 2 回、計 4 回の調査が行われている。県の調査では縄文時代住居跡 1 軒、陥穴 3 基、奈良・平安時代住居跡 4 軒、掘立柱建物 1 棟、中近世土壙 75 基、溝 2 条が検出され、市の調査では奈良・平安時代の住居跡 2 軒、土壙 6 基が検出されている。

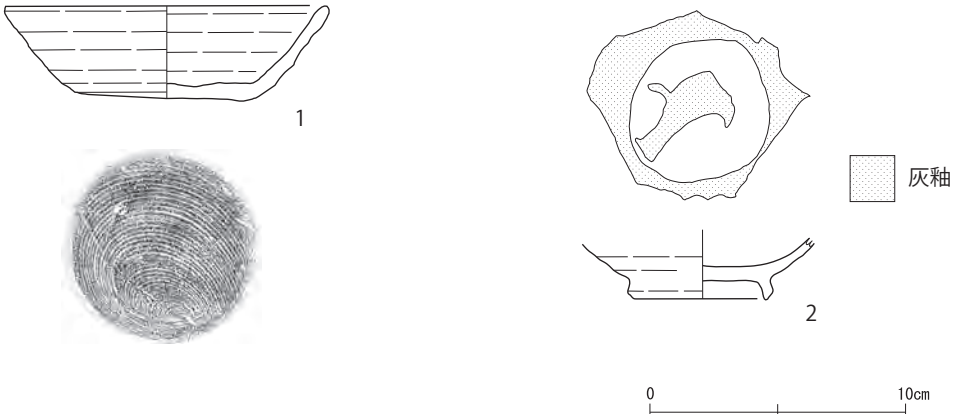
今回報告するのは平成 19 年度に行われた確認調査についてである。遺構は検出されなかったが、縄文土器片や完形の須恵器等が出土している。

縄文時代遺物（第 21 図）

1 は加曽利ＥⅠ式土器の胴部破片で、単節 RL を縦位施文後に沈線懸垂文を引き、地文を磨り消している。2 は吉井城山系の加曽利ＥⅢ式土器で、胴部破片である。上位の波状文に対応し、垂下する蕨状文を施している。地文は単節 RL の充填施文。3・4 は同一個体で、後期加曽利Ｅ系。3 は口縁部で、口唇部は幅の狭い無文帯。2 本沈線で渦巻基調の文様を描き単節 LR を充填施文するが、ネガとポジが不明確。4 も渦巻基調の文様を 2 本沈線で描くが、地文充填は 3 と同様である。5 は大形深鉢の口縁部破片で、区画文の一部と思われる。隆線脇には幅広のナゾリ状沈線を引く。地文は単節 RL で横位施文。6 は後期堀之内式と思われる。沈線による文様の一部が残存する。地文無し。

奈良・平安時代遺物（第 22 図）

1 は須恵器坏の完形品である。器厚が全体的に均一で、体部が底部から垂直に立ち上がっている。底部は回転糸切り後周辺回転ヘラ削り、東金子産。2 はおそらく灰釉高台付須恵器坏の底部から体部下位の破片と思われる。器厚は全体的に均一で、脚と底部との接合は丁寧にされている。全体的に灰釉がかけられている。底部は回転糸切り、東金子産。



第 22 図　中原遺跡確認調査出土遺物（奈良・平安時代）

中原遺跡確認調査出土遺物観察表（奈良・平安時代）

NO	器　種	口径	底径	器高	残存率	胎　土	焼成	色調	特　徴
1	須恵坏	11.6	6.7	3.8	35％	白色粒・砂粒	良好	暗灰色	回転糸切り。東金子産
2	灰釉陶器	―	7.4	5.9	40％	白色粒・黒色粒・石英・小礫	良好	灰白色	回転糸切り。東金子産

写　真　図　版

図版 1

御所の内遺跡第 6 次調査区全景

御所の内遺跡第 6 次調査風景

第１号住居跡全景

第１号住居跡北カマド

第１号住居跡東カマド

第４図１

第４図２

第４図３

第４図７

図版３

第２・３号住居跡全景

第２号住居跡カマド

第３号住居跡カマド

第２号住居跡出土遺物状況

第３号住居跡出土遺物状況

第 6 図 1

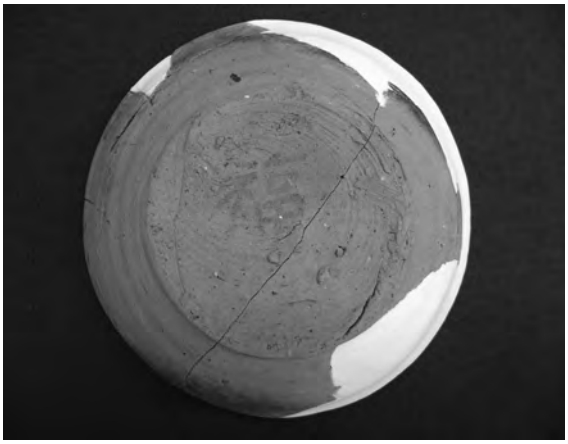
第 6 図 2

第 6 図 3

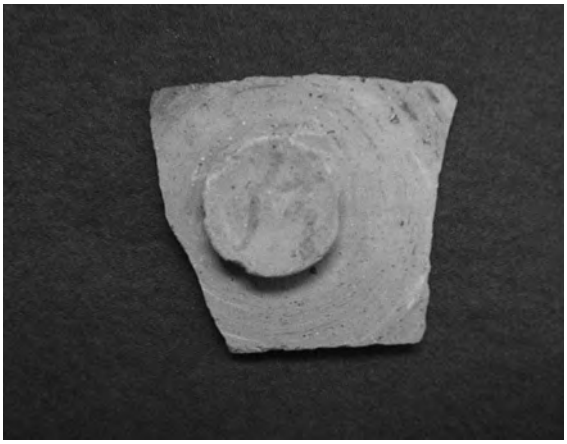
第 6 図 4

第 7 図 1

第 7 図 3



第 7 図 3 墨書「福」



第 7 図 7 墨書「巵？」

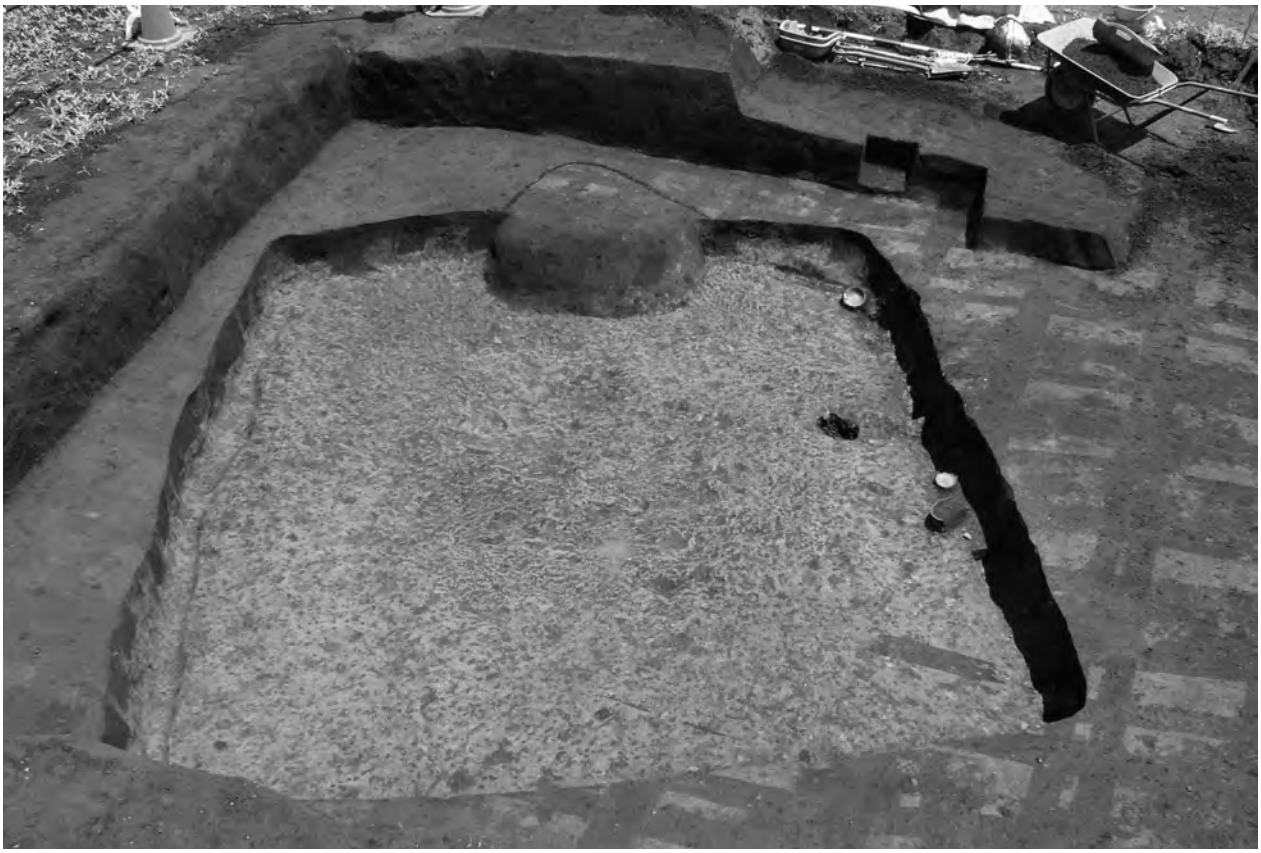
図版 5

第 4 号住居跡全景

第 8 図 1

第 8 図 2

第 8 図 3



城ノ越遺跡第 18 次調査区全景

第 55 号住居跡カマド

図版7

第 55 号住居跡出土遺物状況（Ｎｏ.1）

第 55 号住居跡出土遺物状況（Ｎｏ.2・3）

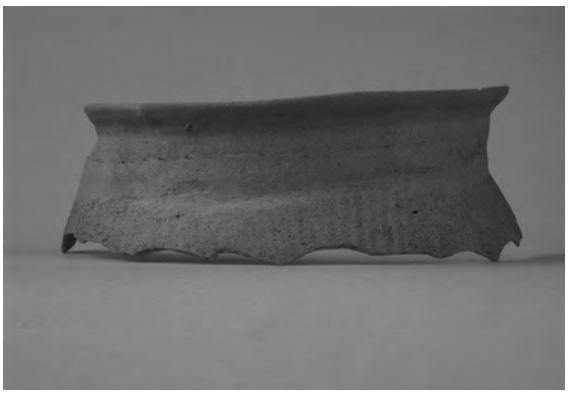
第 11 図 1

第 11 図 1 墨書「舟」

第 11 図 2

第 11 図 3

第 11 図 4



第 11 図 8

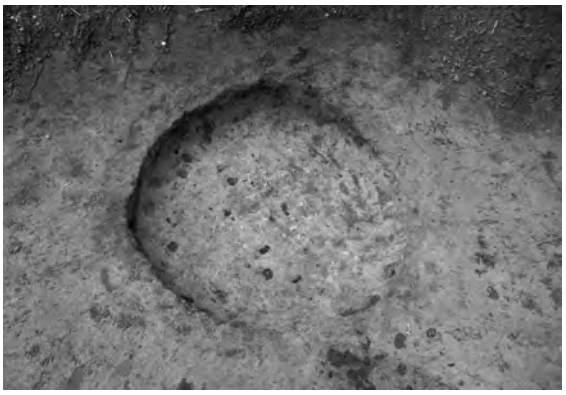
鳥ノ上遺跡第 2 次調査区全景

第 3 号住居跡全景

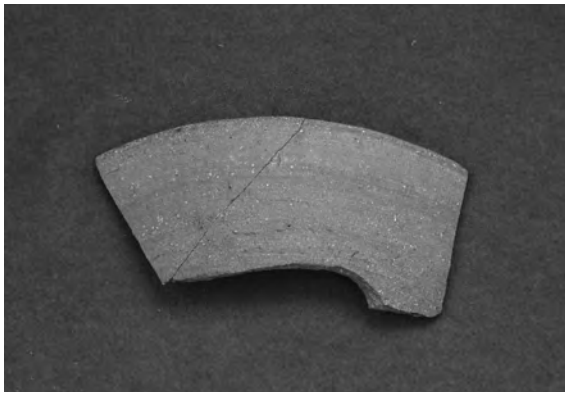
図版9

第３号住居跡カマド（つくりかけ）

道路状遺構



第６号土壙



第 14 図２

第 14 図５

第 14 図６

報告書抄録

ふりがな	ごしょのうちいせき　だい６じちょうさ　しろのこしいせき　だい 18 じちょうさ　とりのうえいせき　だい２じちょうさ　しないいせきかくにんちょうさ
書名	御所の内遺跡―第６次調査―　城ノ越遺跡―第 18 次調査―　鳥ノ上遺跡―第２次調査― 市内遺跡確認調査
副書名	個人住宅建設・ガソリンスタンド建設・市道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	狭山市文化財調査報告　第 30 集
シリーズ名	狭山市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	18
著者氏名	石塚和則・三ツ木康介
編集機関	埼玉県狭山市教育委員会
所在地	〒 350 － 1380　埼玉県狭山市入間川１－ 23 － 5　　TEL04 － 2953 － 1111
発行年月日	西暦 2011（平成 23）年３月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
	埼玉県狭山市（さいたまけんさやまし）							
御所の内遺跡（ごしょのうちいせき）	柏原字御所ノ内（かしわばらあざごしょのうち） 2438 番 32.33	22	12	139° 24′ 27″	35° 52′ 56″	191001 ～ 191031	304	個人住宅建設
城ノ越遺跡（しろのこしいせき）	柏原字城ノ越（かしわばらあざしろのこし） 2323-2 の一部	22	13	139° 24′ 40″	35° 53′ 13″	210604 ～ 210704	70	ガソリンスタンド建設
鳥ノ上遺跡（とりのうえいせき）	柏原字笹久保（かしわばらあざささくぼ） 468 の一部	22	10	139° 23′ 56″	35° 52′ 25″	220419 ～ 220430	100	市道建設
富士塚遺跡（ふじづかいせき）	柏原字富士塚（かしわばらあざふじづか） 291-3	22	9	139° 23′ 53″	35° 52′ 21″	070824	995	駐車場建設
中原遺跡（なかはらいせき）	入間川字沢久保（いるまがわあざさわくぼ） 865-1 外	22	25	139° 25′ 26″	35° 51′ 54″	190111 ～ 190117	4379	社会福祉施設建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御所の内遺跡 第６次調査	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代	住居跡　4 軒 土壙　1 基	縄文土器 石器 須恵器 土師器	重複住居跡検出
城ノ越遺跡 第 18 次調査			住居跡　1 軒		墨書土器「舟」出土
鳥ノ上遺跡 第２次調査			住居跡　1 軒 道路状遺構　1 条 土壙　1 基		作りかけの住居跡検出
富士塚遺跡 確認調査			遺構なし		
中原遺跡 確認調査			遺構なし		

狭山市文化財調査報告　第30集
狭山市埋蔵文化財調査報告書　18

御所の内遺跡　第６次調査
城ノ越遺跡　第１８次調査
鳥ノ上遺跡　第２次調査

個人住宅建設・ガソリンスタンド建設・市道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
附篇　市内遺跡確認調査

平成23年３月　印刷
平成23年３月　発行

発　行　　埼玉県狭山市教育委員会
埼玉県狭山市入間川１丁目23番５号
ＴＥＬ　　０４（２９５３）１１１１

印　刷　　有限会社　ミネ五十子印刷

【正誤表】

御所の内遺跡-第6次調査-　城ノ越遺跡-第18次調査-
鳥ノ上遺跡-第2次調査-
（狭山市文化財調査報告　第30集）

ページ	行	誤	正
6ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	46 坂上遺跡	22029	22030
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038
32ページ	13行目	「「舟」	「舟」
	20行目	「舟？」	「舟檝」
	21行目	「舟？」	「舟檝」
	22行目	「舟？」	「舟檝」
報告書抄録	御所の内遺跡　北緯	139°24'27"	35°52'56"
	御所の内遺跡　東経	35°52'56"	139°24'27"
	城ノ越遺跡　北緯	139°24'40"	35°53'13"
	城ノ越遺跡　東経	35°53'13"	139°24'40"
	鳥ノ上遺跡　北緯	139°23'56"	35°52'25"
	鳥ノ上遺跡　東経	35°52'25"	139°23'56"
	富士塚遺跡　北緯	139°23'53"	35°52'21"
	富士塚遺跡　東経	35°52'21"	139°23'53"
	中原遺跡　遺跡番号	25	38
	中原遺跡　北緯	139°25'26"	35°51'54"
	中原遺跡　東経	35°51'54"	139°25'26"